

---

# 悪魔王ナノガイガー 第二部・新生編

かがみん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔王ナノガイガー 第二部・新生編

### 【Nコード】

N9779M

### 【作者名】

かがみん

### 【あらすじ】

なのは×ガオガイガー小説  
第二部です

註

公式設定と矛盾する記述もございますが、ご了承ください

## オープニング

オープニング

悪魔王誕生！！ TV Size

ななな ななな ナノガイガー  
ななな ななな ナノガイガー  
叫べ！ 管理局のエース  
赤い宝石 白いジャケット

希望導くレイジングハート  
野望の使者を叩くため  
翼で舞い上げ

人と悪魔の狭間ゆく痛み  
胸の奥に秘めて

ななな ななな ナノガイガー  
ななな ファイティングナノガイガー

ファイナルフュージョン承認だ今だデバイス合体だ

豪煌爆碎！

デivainバスター！！

元気！！勝利！！情熱！！ファイティング！！

誕生！！

エースだ 星々の宝

新たな悪魔王 なななナノガイガー！！

かつて、次元世界には幾つもの文明が興隆し、そして滅んでいった。

滅亡の原因の一つに、質量兵器の存在が挙げられる。

新暦1年、その使用を一切禁止されるまでは、質量兵器がほとんどの世界における主流であった。

質量兵器とは、現代の定義において「魔法を使わないすべての技術を用いて制作された武器兵器」の総称である。  
では「魔法」とはなんなのか。

あまたの魔導師を擁する時空管理局が発行する辞書によると、「魔力素を特定の技法で操作し作用を発生させる技術体系」だという。  
世界には魔力素と呼ばれるエネルギーが点在し、魔導師はそれを基に物理法則を任意に書き換え、望んだ現象を起こすのである。  
それに比べ、魔力を全く介在させない質量兵器は、純粋な科学技術のみで作られていた。

魔法の場合、戦闘用でも「非殺傷」設定などで「命を奪わぬ」ように調整が可能だ。

しかし、質量兵器にはそのような加減は難しい。  
旧暦の時代には、ボタン一押しで都市が灰燼と化す大量破壊兵器や子供でも簡単に扱える実弾武器が次々と造られ、戦争を加熱させていった。

たとえ世界が残っても、危険な物質で汚染された挙げ句に環境が手痛い打撃を受けて生存者を苦しめたという記録もある。

新歴に至り、そういった悲劇を回避するために質量兵器の製造も使用も法で固く禁止されたのであった。

魔法は使用後は熱と魔力素を放出するにとどまるため、環境に対して影響を与えることがない。

もちろん、大規模な魔法による破壊も行われたりする。

しかし、それは主に犯罪者が違法に実行するケースがほとんどであり、それに対処するのが管理局の職務といえた。

次元犯罪者と定められたる魔導師や技術者たちは、己の野心や欲望を果たす為に、非人道的な魔法の使用を繰り返す。なかでも、旧暦より伝わるロストロギアを手にしうという人物は、管理局にとって最も警戒を必要とした。

時には質量兵器より危険なロストロギアは、現在の技術では復元不可能な「オーバーテクノロジー」の産物である。

蒼の星・地球にもたらされた、緑の星の超技術と立場的に同じと言えようか。

時空管理局戦技教導官・高町なのは一等空尉は、これまでそうしたロストロギアとしばしば遭遇してきた。

P.T事件のジュエルシード　大規模な儀式魔法に使う高密度の魔力結晶体。

闇の書事件の闇の書　真の名を夜天の書と呼ぶ、魔導書型デバイス。マスター本人にも負担を強いる故障により、世界そのものを破

壊に導く。

そして、先頃終息した、JS事件の聖王のゆりかご　古代ベルカ  
時代の最終兵器。

何れも容易に世界の破壊が可能なロストロギアであった。

とは言え。ロストロギアは発掘も稀であり、出土した遺失物は管理局により厳重に保管される。発掘や違法手段以外の方法ではまず入手は無理で、使用には魔法の素養が必要だ。

一方質量兵器なら赤子でもスイッチを押すだけで起動する。  
なればこそ、伝説の三提督の時代から、質量兵器根絶の為の努力が  
ずっと続けられてきたのだ。その甲斐もあって、新歴も半ばを過ぎ  
た現在、質量兵器は世界の表舞台から姿を消していた。

だが。

魔法全盛の中に生きる彼らの前に、再び強大な質量兵器が現れる。

ソール11遊星主。

その存在を知った管理局の人々は一様に恐れを抱いた。

純粹なる科学技術で創られた、異質なる生命体。

遙かな次元の彼方より訪れた、異邦人。

物質を瞬時に再生させ、数百の飛行兵器を自動生成し、巨大なメカニズムと融合する能力……魔法を使わずこれだけのことが実現する技術に、時空管理局は戦慄した。

遊星主の目的はミッドチルダの人間には不明瞭だったが、天海護少年には、三重連太陽系の再生のみが狙いであると直感している。

元来、滅亡した三重連太陽系の再生が遊星主に与えられた使命であり、その為ならば他の宇宙が滅びようが構わないという非情ぶりだった。

護が大切に想う地球は、三重連太陽系再生の犠牲となつて、滅亡の淵に立たされていた。それを阻止するため、あえて護は生まれ故郷を守護する遊星主に逆らつたのである。

そしていまや、地球だけではなく、護が偶然にも訪れる事となつた次元世界もまた、遊星主の前に存続を危ぶまれていたのだった。

護は凱と共に、現地の司法組織である時空管理局と協力する事に決めた。管理局はこの世界におけるG G Gのような組織だと護は理解している。

管理局の魔導師たちも熱い勇気を持った「勇者」なのだと、少年はゆりかごでの出会いで知った。

かくして。

地球から次元世界の存在を賭けた戦いへと、護と凱の戦闘はシフトしていった。





# KING OF DEVIL NaNoGaiGar Part2 Epis

更新遅れてすみませんでした(;´・`・)

細々ですが ゆっくり更新していきます

見<sup>み</sup>えるかす大海原、高く晴れ渡った青空が、視界いっぱい広がっていた。柔らかい風が頬を優しく撫でていく。

ミッドチルダの海上に大きな施設が設けられていた。

主に若年犯罪者を収容する海上隔離施設である。

その、施設のなかを、一人の女性が歩いていた。

時空管理局陸士部隊の制服を着た、髪の長い清楚な女性。

ギンガ・ナカジマ陸曹。108部隊に所属する陸戦魔導師である。

「あら」

ギンガはこちらの方へやって来る、小柄な人影に気づいた。  
キヨロキヨロと不慣れな視線で、施設を歩いていく。

「キャロ〜」

ギンガは人影に向かって声をかけた。それに気づいたキャロが、

「ギンガさん！」

ばたばたと、ギンガのところに駆けてくる。

「おはようございます」

びしつと敬礼しながら、キャロ・ル・ルシエ三等陸士は挨拶した。

「きゅくるうー」

主の真似なのか、キャロが連れている小さな竜、フリードリヒも鳴き声を上げた。

古代遺失物搜索部隊機動六課フォワードチーム最年少の10歳。

セミロングのややくせのある髪に、あどけない顔立ちの少女である。ギンガの妹スバルの同僚にして、ライトニング分隊の竜召喚士。コールサインはライトニング04。

管理局員の制服を着ていても、ビシツとした印象より可愛らしさの方が際立っていた。

「おはよう、キャロ。今日はエリオと一緒にじゃないのね？」

「はい。みんなは首都の警備のために、市街地の方に行ってます」

JS事件からまだ一日しか経っておらず、街の治安を懸念する地上部隊からの応援で、機動六課も警備や交通整理などに協力していた。いつても、フォワードを率いる高町一等空尉やヴィータ三等空尉は、事件での負傷と疲労のため、動くことを禁じられていたのだが……。

「あの、遊星主とかいう敵を警戒して、みんなかなりぴりぴりしてるみたいでした」

と、キャロの説明を聞き、ギンガは「そう」と、頷いた。

JS事件が終わって、まだ二日目。事後処理を含めて管理局は対応に追われていた。まして、遊星主という未知の敵が表れたからには

……。

「それでキャラはどうしてここに？」

「ルーちゃんに会いに」

「ああ。ルーテシアね」

「J・スカリエツィに手を貸していた召喚魔導師の少女。  
ルーテシア・アルピーノ。」

「ルーちゃんに伝えたいことがあるので、ギンガさんに頼みにいこうとしてたんです」

ギンガは事件集結後、海上隔離施設で捕まった戦闘機人たちの再更正プログラムを担当することが決まっていて、その前段階として、戦闘機人たちと話をよくしに行っていた。

自らも戦闘機人であり、一度は洗脳されて『13番目のナンバーズ』  
となった彼女だからこそ、更正プログラムの担当者には適任と言えた。

「直接、伝えるわけにはいかないの？」

「えっと、どうしても、私から伝えたくて……それに、ルーちゃんの様子も知りたかったし……」

もじもじと、キャラはギンガに言った。

「そう。それで一人で来たのね」

「はい」

まっすぐに彼女の目を見て、キャロが答えた。  
淡い笑みを浮かべ、ギンガは頷いた。

「わかったわ。私に着いてきて」

と、施設内の案内を引き受けてくれた。

JS事件において、ルーテシアとキャロは互いに召喚士として、幾度かぶつかりあった。信じるもののため、大切な人を護るために。そしてルーテシアは敗れ、逮捕された。その二人の因縁とも呼べる関係を思い出したギンガは、キャロの頼みを断ることができなかったのだ。

ルーテシアが居る部屋に向かって歩き出したギンガに、キャロはほっとして、その後をフリードと共にについて行った。

犯罪者を収容しているだけあり、施設は厳重なセキュリティで守られている。魔導師などは能力を封じられ、脱出が出来ぬようつねに監視されていた。

ギンガはルーテシアに宛がわれた部屋の扉の前にキャロを案内した。

「ちょっと、いいかしら。貴女にお客さんが来てるの」

と、扉に備え付けられた送話機に話し掛ける。

『……いいわ』

聞こえてきたルーテシアの声に、キャロははっとなった。

「では、開けるわね」

扉の装置にブリッツキヤリバーを通して認証コードを打ち込み、ロックを解除する。

シュツと小さな音をたてて、扉が開いた。

「行きましょう」

「は、はい」

怖ず怖ずとした様子で、キャロは部屋の中に足を踏み入れた。

中は質素に片付いていた。簡単なテーブルやベッド、戸棚などが置かれているだけで、華美な装飾品など全くない。

それどころか、生活臭すら皆無とさええた。ここに容れられて日が浅いとはいえ、あっさりし過ぎている。

それが、改めてこの場所が『独房』なのだとキャロに思わせた。

しかし、目の前のルーテシアには不満の色もなく、相変わらずの無表情で、ベッドにちょこんと腰掛けている。

「ルーちゃん……お、おはよう」

躊躇いがちに、キャラが口を開いた。

「……お客さんて……貴女なのね」

ぼそつとした口調でルーテシアは言った。

彼女はスカリエッティに利用され、テロ行為に荷担した召喚士である。

キャラが召喚したアルザスの守護神ヴォルテールに匹敵する召喚虫「白天王」をも操るほどの能力者だった。

見た目はごく普通の少女である。年格好はキャラとあまり変わらないだろう。艶やかな長い髪に、華奢な体格をしている。背は少しだけキャラより高いといったところか。

しかし。幼いとはいえ、彼女は六課襲撃等では多くの人達を傷つけた。当然無罪にはなり得ず、何らかの処罰が課せられるだろう。

それを決定する裁判の日まで、彼女はこの部屋に拘束され続ける。

キャラは、毎日こんな部屋で過ごして退屈しないんだろうかと、ふと頭に浮かんだ。

寂しくはないのだろうか、と。そこで急に思い起こしたのは、ルーテシアと行動していた融合騎や、彼女を「お嬢様」と呼ぶ戦闘機人たちのこと。アギトたちがいれば、たいてい孤独ではないのかもしれない。

キャラはそんなふうにも思った。

（それに……私も……）

「それで、私に何の用？」



この事を伝えれば、きっとルーちゃん、喜んでくれる。キャラは確信しながらルーテシアに言った。

「実はね、ルーちゃんのお母さんのことなの」

「！」

ハッと、ルーテシアの表情が変わった。  
不安と期待がないまぜになった顔だ。

……そもそも、ルーテシアがスカリエッティに協力するきっかけは、彼女の母親、メガーヌ・アルピーノがその原因だった。

新歴67年。

当時、首都防衛隊ゼスト・グランガイツの部下であったメガーヌ・アルピーノは、同僚・クイント・ナカジマ等と共に、違法な実験が行われていた施設に突入した。

それは後世、戦闘機人事件と呼ばれる悲劇的な事件へと発展する捜査であった。

昨今、人造生命の操作実験が非合法で繰り返され、管理局もかなりの部隊を投入する。地上の治安に腐心していたゼストは、本部からの圧力を受けて、捜査から外されそうになり、焦りを覚えていたという。

彼は事件捜査を打ち切られる前に強攻策を採った。精鋭部隊を率いて目星をつけていた研究施設に、強制捜査に踏み込んだのだ。そこでは、人造魔導師に機械で強化した戦闘機人が制作され、また他の兵器も造られていた。ここで違法技術者を逮捕すれば……。ゼストたちは研究施設の制圧に、全力を賭けた。

だが。その施設にはスカリエッティが関与していたのだ。ナンバーズの一人、チンクとの死闘の末、ゼストは死亡。また、ガジェットとの戦闘で機動六課スバル・ナカジマの母クイントも、同じく戦死する。メガーヌは負傷したところをスカリエッティに拉致された。

これで、ゼスト隊は全滅し、スカリエッティには貴重な実験素体を手に入れたわけだ。

そして。幼かったルーテシアもスカリエッティの元に連れ去られ、改造と洗脳を受けた。

死亡したゼストは、スカリエッティの技術で蘇り、協力者にさせられる。

ゼストもルーテシアも、古代ベルカの遺産たるロストロギア、レリックとリンカーコアが融合した「レリック・ウェポン」の実験体になった。

それは、彼らの目的のひとつ、「聖王」と「聖王のゆりかご」を復活させるための、実験の一環である。

「１１番目を探さないと……」

ルーテシアにスカリエッティは「XⅠの刻印があるレリックを見つけたせば、君の母親は目覚める」と偽りを吹き込み、自分たちの犯罪に利用したのだ。

母親との再会を望む彼女は、六課の捜査を自分の願望達成の邪魔物として認識し、容赦ない攻撃を与えた。機動六課隊舎襲撃では、「聖王の器」ヴィヴィオ誘拐も行った。

全ては母メガーヌを蘇らせ、自分がない「感情」を手に入れるために。

そのために必要なレリックの搜索だった。その過程でレリックを巡り機動六課とは幾つかの戦闘を繰り広げた。

JS事件の発端となったレリックは、古代ベルカに創られた現在では製法が失われたロストロギアである。超高密度の魔力結晶体。巨大戦艦「聖王のゆりかご」を動かすジエネレーターであり、聖王を起動させる力の源としても使われる。

スカリエッティはゆりかご復活に向け、レリック・ウェポンを開発。実験データの収集に余念がなかった。

ゼストもルーテシアもまさに「兵器」として使われたわけだ。

ルーテシアにはさらに、外部から行動を操作する機構も取り付けられ、最終決戦においてこの機構を介してクアットロにより感情と力を暴走させられた。

限界を越えた力で究極召喚「白天王」を行使し、ライティング隊を危地に陥らせる。

が、召喚士として成長したキャロ・ル・ルシエの呼び出した真竜ヴオルテールによって白天王は押さえ込まれ、ルーテシアは魔力を使い果たして気絶。

キャロとエリオは召喚虫たちを収め、暴走を止めた。

あとは。逮捕・拘束されてこの海上隔離施設に送られて今に至る。

重犯としてナンバーズのウーノやオットーなどは各世界の軌道拘置所に收容され、比較的管理局に協力的な他の姉妹たちはルーテシアと同じ隔離施設に容れられた。

近々、裁判にかけられる身だが、能力の封印と行動を監視させられる事を除けば、案外自由に過ごせることができた。

「あのね、昨日ルーちゃんのお母さんの検査結果が出たから、知らせに来たの」

「本当！？」

ルーテシアは逸る声で訊いた。

JS事件の終盤。スカリエッティ・ラボから救出された人々の中には、ルーテシアの母親もいた。

培養槽ですつと眠りについていた彼女たちは仮死状態のまま、すぐさま病院に搬送され、治療と検査が始められた。

「肉体的な異常は見られないって、シャマル先生が言ってた。身体は弱ってるけど、脳死じゃないから、リハビリすれば普通に生活できるようになるんだって」

古代ベルカ式の使い手、湖の騎士シャマルは、優れた医師でもあった。そのデバイスたるクラーヴイントは探索やバックアップに特化した機能を備えている。その能力を用いた診断は患者の容態を探るのにも絶大な威力を発揮してくれた。

むろん、最新の医療機器を駆使しての検査もあったが。

「そう……なの」

ルーテシアの瞳に、安堵の色が浮かんだ。

キャロの顔も心なしか嬉しそうだった。

「まだ意識は戻ってないけど……レリックなんかなくても、治療を続けていればきっと、目が醒める。そう、先生が教えてくれたの」

「お母さんが……目醒める……」

ルーテシアは泣きそうな貌をした。

「お母さんと……一緒に……暮らせるかな……私」

「大丈夫だよ。きつと。お母さんと暮らせるようになるよ、ルーちゃん」

涙を零しはじめたルーテシアの肩をそっと抱いて、キャラが言った。

「うくっ……ぐすっ……ひっく……」

嗚咽を堪えるルーテシアの姿に、キャラはなんとか彼女の保護責任者になれないものだろうか、と思った。

自分にその権限があれば、ルーテシアの保護者としてなにかと便宜を図ってあげられるのに。そうすれば、裁判などで彼女を擁護しやすくなるだろうし、刑期も軽いものにしてもらえるかもしれない。

現に、ナンバーズたちはナカジマ陸佐や聖王教会の騎士カリム、シスター・シャツハが保護者として名乗りを挙げている。

キャラはなのはやフェイトに頼みたかったが、忙しい身の上の隊長たちの迷惑になるやもと思い断念した。

だが、もし彼女のために自分にできることがあるのなら、躊躇いなく、責任を持って尽くそう。そんな決意をキャラは抱いていた。

「……ねえ、それを伝えに、わざわざここに来たの？」

目を擦りながら、ルーテシアが訊いてきた。

「え？ う、うん。えっとね、私の口から伝えたかったの……ルーちゃんの様子も気になってたし」

「あと。前から聞きたかったんだけど。知り合いでもない、それどころか敵対すらしていた私に対して、なんでそんな風に馴れ馴れしく呼ぶの？」

「それは……」

最初に遭遇した時から、キャラは「ルーちゃん」と彼女に向かって呼んでいた。その時は本人が名乗らず、アギトが「ルールー」と呼びかけたりしているのを聞いて「ルーちゃん」と漠然と覚えたわけだが、事件の最中、ルーテシアの素性を知ってから「ルーちゃん」と親しげに呼んでいた。

「えつと……」

「……」

「友達になりたい……から、かな」

ふつと、優しい笑顔になって、キャラが言った。

「友達？」

「うん……友達になりたいの」

フェイトがその光景を目にしてたら、あるいは驚いたかもしれないかつて。10年以上も昔。

同じ言葉をなのはから伝えられた彼女ならば。

「ルーちゃんのこと知った時から思ってたの。私と同じ召喚士で私と似たような悲しみを持った子がいるんだなあって。もし、ルーちゃんの悲しみを変えられたら……友達になれるかなって」

「何それ。同情したから、友達になってあげましょって、優越感に浸りたいの？」

「違うよ！それは違うー！！」

険しい目をしはじめたルーテシアに、キャロは反論した。

「たしかにかわいそうだとは思ってたけど。でも、私は優越感とかそんなんじゃない……ルーちゃんとなら友達になれると思ってたから……ただ、それだけだよ。だって一人は寂しいから……」

「私は散々、貴女たちを傷つけてきたのよ。それでも、許せる？」

「あれは 騙されてたから……操られてたから。本当のルーちゃんは優しいいい子だって思うから」

「どうして解るの？本当の私がどういう人間なんて」

「だから。これから。本当のルーちゃんを知りたいから、ルーちゃんと。友達になりたいの」

キャロはルーテシアの手をそつと握った。  
温かい手だった。

「！」



ルーテシアの頬が紅く染まる。

「私だけじゃなく、エリオくんも、スバルさんやティアさんも！  
きつと、ルーちゃんと仲良くなれるはずだよ」

キャラは、にこつと、微笑む。

「……どうすれば。私と貴女たちが友達に、なれるの」

ふいと、視線を逸らしてルーテシアが訊ねる。

「フェイトさんが教えてくれたの。友達になる、第一歩は『なまえを呼ぶ』だって」

皆でなのはの過去を知った、ホテル・アグスタの一件の後。エリオとキャラはフェイトから二人の馴れ初めを聞き出していた。

今のルーテシアのように、頑なな態度のフェイトを変えた、「別れ」の話を。

『なまえを呼んで』

なのはから言われ、フェイトは初めて「友達」の名前を呼んだ。

だから、キャラも同じように

「なまえを呼んで……私はキャラ、キャラ・ル・ルシエだよ」

「キャラ、キャラ……」

躊躇いがちに。小さくその名を声に出した。

「うん。ルー……ルーテシアちゃん」

「本当に私と……友達になれる？」

「そうだよ。私は悲しい過去は消せないけど、でも、楽しいことや嬉しいことは今からでも作れるってことをみんなから教えてもらったもん」

「キャロ……」

「フエイトさん言ってた。どんな子供も幸せになれる権利と変えられる未来があるんだって……だから。これから変えて、作っていう。ルーちゃんの新しい未来を……一緒に」

「新しい……未来」

「お母さんと、ルーちゃんと……私たちで」

そうすれば、いつか、フエイトさんやなのはさんたちみたいに……私たちも……

「そうね……もう、戦わなくてもいいのよね……普通に、お母さんと暮らせて……友達もいて……そして」

ルーテシアの瞳は潤んでいた。ずっと、胸の奥に封じ込んできた、小さな願い。

他の子供と同じ。普通の穏やかな暮らし。

キャロはそこで確信していた。ルーテシアは自分には感情はないと言っていた。それはスカリエッティによる操作によってであり、そう思い込んで意識の底に押さえ付けていただけなのだと。

「大丈夫。きつとこれから、その願いは叶うよ。私たちも手を貸すから」

「根拠のない、楽観的な話ね……有罪判決で私も軌道拘置所に容れられる可能性、あるのに。キャロ」

冷たい物言いに、キャロはちよつとシユンとなった。

「でも。ありがとう……」

照れ臭げに、ルーテシアは呟いた。

キャロは微笑して、ルーテシアに頷く。それから、また会いに来ることを約束して、暇乞いを告げる。現在起こっている事件については口にしなかった。

そんな、二人の少女たちのやり取りを、ギンガは穏やかな笑顔を浮かべて見つめていた。

彼女も、昨日、ナンバーズに対し同じような言葉を交わしたのだ。スカリエッティに改造され、妹に拳を向けた過ちを償うためにも。ギンガは戦闘機人たちを「機械」でなく「人」として、幸せにしてあげたいと。キャロとルーテシアの事を見ながら強く思った。

自分も「友達」になりたいから。  
スバルが、ティアナたちと絆を深めたように。

（お母さんが私たちを愛してくれたみたいに。私も、彼女たちを大切にしよう。戦うために生まれてきた身体でも、人の幸せを手に入られるのだと、伝えていこう）

この目の前にいる、勇気ある少女のように

KING OF DEVIL NANO GARGAR Part 2 Episode

だいが更新が遅れました  
すみませんです！orz

蒼く枝葉を繁らせる大樹の根元で、一人の少女が寝息をたてていた。年の頃は14、5歳だろうか。幼く見える顔立ちに、兎の耳のようなヘアスタイルが特徴だった。制服を着たまま仰向けで眠っている。

(命……命)

そんな彼女の意識に呼び掛ける声があった。  
卯都木命がよく知った、幼なじみの声。

(ん……凱?)

獅子王凱の声は、起きると、命に何度も呼び掛けを続けた。

(もう……わかったわよ。せつかく、気持ち良く寝てたのに。凱っ  
たら……)

命はうつすらと、目を開けた。逆光の中に、少年のシルエットが浮かび上がる。髪を短く刈った、体格の良い少年であった。

(凱)

(やっと起きたか、命)

凱はホッとしたように呟いた。

(どうしたのよ。そんなに慌てて……)

（俺達にはお前の力が必要なんだ）

命は首を傾げる。

（私の力？）

私に、なんの力があるのだろう。むしろ、高校生でありながら宇宙船パイロットに選ばれた凱の方がよほど自分より優れた能力の持ち主ではないか。

（お前にしかできないことがあるんだ）

凱はまだ寝転んだままの命に、手を差し出した。  
大きな手だ。

（さあ。早く行くぞ）

（ちょっと、どこによ？）

（俺達の誓いを果たす場所だ）

（なんの誓いよ？）

命は困惑した。

（忘れたのか。俺達の……勇気ある誓いを！）

（勇気ある……誓い……）

（思い出せ、命）

がっしりと、凱は命の掌を握り締めた。

（凱……）

（さあ立ち上がるんだ、勇者として！！）

ぐいっと、命の腕を引っ張った。

（……！！）

そして。命の意識を鮮やかな緑の光が包み混んだ。  
遙かな時空を飛翔したような気がした。

（私……私は……！）

光の洪水が弾け

「はっ……！！？」

命は双眸を見開いた。  
白い天井が、眼に映る。



「こ……ここは？」

命はベッドの上に寝かされていた。  
ゆっくりと上半身を起こすと、質素な装いの部屋に居ることがわかった。

「病室？」

まさに病院の一人部屋といった風情の部屋で、窓の向こうに美しい山や森が広がっている光景が見えた。  
命には、全く見覚えのない景色だった。

「一体、こ……どこなの？」

例えようもない不安感が胸に込み上げてくる。迷子になった子供のような心境だ。

さらに。身体にかかっていた布をまくると、服が変わっていた。  
GGG隊員の制服を着ていたのが、黄色いパジャマになっている。

命はベッドを降りようとした。

（もしかしたら遊星主に拘留されたのかしら？）

命は敵の名を思い出した。ソール11遊星主。赤の星に誕生したプログラム。彼女は、その遊星主と戦っていた。仲間と共に。

（そうだ。みんなはどうしたのかしら！？ 凱！！）

焦燥感が募る。

凱は敗北から立ち直り、再び勇者としての姿を見せた。命は喜んだ。だが、それがまた離れ離れになってしまった。

（凱を捜さないと！！）

こんな場所でうろたえている場合ではない。GGG隊員として行動しなければ。

そう、決意の表情を浮かべたとき。

ガチャリと、ドアが開いた。

たてがみを思わせる長髪の青年が部屋に入ってくる。

「命、目が醒めたんだな！」

獅子王凱の顔には、安堵と慈しみの色が浮かんでいた。

「凱……」

青年は恋人の元に歩み寄ると、優しく抱きしめた。

「俺……命が二度と目を醒まさないんじゃないかって……怖かった。でも、よかったよ。命」

「心配かけてごめんね……凱」

涙をこぼしながら、命は謝った。凱のたくましい胸板に頬を埋める。

「おかえり、命」

「ただいま……凱」

こうして、卯都木命は、勇者のもとへと帰還を果たした。  
だが、その覚醒は新たな戦いの開始を意味する序章となる。  
凱と命に新たな力と使命を与える戦いの。

「え〜と、お熱いところを悪いんやけどな……」

「!？」

いきなり背後から聞こえてきた声に、凱と命はビクツとなり、慌ててお互いから離れた。

「驚かせてすまんなあ。まあお目覚めしてなによりや」

と、二人だけの世界に割り込んできた女性は謝ったが、その口許はにやついていた。

「八神隊長……」

凱と命は赤い顔で、女性の前に並んだ。

「凱、この人は？」

と、命は彼女の事を訊ねる。

「おっと、これは失礼した。私は八神はやて。時空管理局遺失物捜索課機動六課の隊長です」

「機動……六課？」

命はキョトンとなった。思わず凱は苦笑する。

「まあ、私らの事はおいおい説明するとして……それでな、これから会議があるねん。それに二人も出席してもらってから」

と、はやては凱たちに伝えた。

「そこで、あんたらの事情も詳しく聞かせてもらって」

# KING OF DEVIL NaNoGaiGar Part 2 Episode

次の更新まで、まただいぶ間を置いてしまつと思いますが、どうか見捨てないでくださると助かります

ミッドチルダ北部にあるベルカ自治領。そこにある聖王教会が運営する聖王医療院。

命は短い検査を受け、退院してもよいという医師のお墨付きをもらった。彼女の身体に異常も見つからず、健康体だと判断されたのだ。

「私、二日も寝てたの!？」

廊下で凱から話を聞かされ、命は驚いた。

記憶が曖昧なため、時空間を越えたという自覚は皆無である。

「Gクリスタルが破壊されて、凱がギャレオンの中から現れたところで記憶が途切れてるわ」

先を歩くはやてに従って、凱と命は医療院のロビーを進んだ。

やがて玄関を抜け、外へ出ると、緑の自然が視界に飛び込んできた。異世界と言うが、まるで北欧辺りを旅行しているような気になる。はやては駐車場の方に向かう。すでに部下が待機しているはずだ。

車の見た目は地球の自動車とほとんど変わらなかった。

「隊長」

「お待ちせや、アルト」

運転席には機動六課ロングアーチのアルト・クラエツタが隊長の帰りを待っていた。小柄だが、元気な雰囲気少女である。ロングアーチを統括するアルトの上司シャリオ・フィニーノが出かけているため、今回の運転手を頼まれたのだ。

早速アルトは車のドアを開けた。

はやては助手席に乗り込んだ。凱と命は後部の席に並んで座る。

「ほな、地上本部まで頼むわ」

「了解」

車は発進した。

「どこへ向かうの？」

と命が訊いた。

「クラナガン……ここの中心らしいぜ」

と、凱は説明した。

ミッドチルダ中央部。首都クラナガン。

時空管理局地上本部はそこにあつた。

車は急ぎ足で、湾岸高速を疾走していく。

「フェイト執務官はもう本局かな？」

「はい。一時間前にシャーリーさんから連絡がありました」

「他の皆は会議室に集まってるのかな」

「みたいです」

「よっしゃ。これでやって本格的に動き出せるな」

はやては機動六課の設立にこぎつけた時の様な興奮を覚えていた。

「JS事件が終わってまだ間もないのに、皆さん大張り切りですよ  
ね」

「こういう事態が起きた時のためにあるんが、うちらみたいな部隊  
やからな！」

はやては力強く言った。

「あんたたちにも期待してるで、GGGの人！！」

「ああ！」

凱は不敵な笑みを浮かべながら、指を立てた。

ここ数日。管理局地上部隊はスカリエッティから受けた被害や事件の收拾におおわらわで、新たに出現したソール11遊星主に対する行動に踏み切れずにいた。しかし、二日を過ぎミッドチルダは落ち



着きを取り戻し、はやての呼びかけでようやく遊星主の対策会議を開けることとなった。

会議は首都クラナガン、管理局地上本部ビルで行われる。

戦士たちの休息は終わり、戦いの嵐へ再び翼を振るう時が近づいていた。

そして遊星主もまた、雌伏から活動に移ろうとしていた……。

KING OF DEVIL NanogaiGar Part2 Epis

次の話はFinalGGG二話のよつに総集編になりますorz

K I N G O F D E V I L

N a N o G a i G a r

P a r t 2

E p i

総集編になります……

幸いと言っべきか。

時空管理局地上本部はジェイル・スカリエッティのテロ襲撃に会いながらも、機動六課隊舎ほどの被害を免れていた。

また、地上部隊を統括する施設であることから、優先的に修復を受けて組織の中核としての役割を回復させつつある状態だ。

最も、レジアス中將の死によって、強力な指導者を失い、地上本部を纏めるリーダー役が不在であった。本部長以下、レジアスのイエスマンばかりしかいなかったからでもあるが、そんな中、八神はやての名が急速に支持されつつある。

JS事件を解決した奇跡の部隊の長。そしてレジアスに迎合せず批判すら辞さない凜とした態度が、うろたえ気味の隊長たちには頼もしく映ったのだ。

ここ数日で、はやては各部隊のイニシアティブを制する程の人望を築いていた。

今回開催される遊星主対策会議も、それがあってこそ、こぎつけられたものである。

自らはやてが発起人となって、地上本部に遊星主対策本部が置かれることとなった。

スカリエッティ事件解決の功績の賜物だった。

会議は10時から開かれるが、会議室は9時前にはすでに参加者が集まっていた。

皆、それだけこの事件への関心が高いという事だ。

会議室はかなり広く、正面には大きなディスプレイが設置されていた。

本部の上役、各隊長たちをはじめ、G G Gからは獅子王凱、卯都木命、天海護ら、機動六課からは主催者の八神はやて、高町なのは、シグナム、ヴィータ、リインフォースIEIが出席している。また次元通信を介しては、時空管理局本局の次元航行部隊の提督たちやフエイト・T・ハラオウン執務官、三重連太陽系を代表してソルダートJと彼と行動を共にしている対特殊犯罪組織シャッセルのルネ・カーディフ・獅子王捜査官が、聖王教会からは騎士カリム・グラシアがオブザーバーとして参加する。

「それでは、これより遊星主対策会議を始めたいと思います」

はやてが厳かに宣言すると同時に、リインがある映像をディスプレイに映させた。

「これは……」

「これは次元航行艦クラウディアによって観測、撮影された遊星主の基地の映像です」

とはやてが解説した。

星々の間に、太陽のように輝く巨大な天体である。もちろん、ただの恒星であるはずもない。

「今のところ、連中はなりを潜めています、油断はできません」

「そもそも」

隊長の一人が手を挙げ質問した。

「遊星主とはなんなのだね？スカリエッティの仲間なのか」

「そのことに関しては、彼に説明してもらおうが早いでしょう」

と、傍らの少年に話をふった。

「えっと。皆さんはじめまして。天海護と言います」

緊張しつつも、真剣な眼で、護はマイクを握った。

「僕たちはソール11遊星主と同じく、別の宇宙からやって来ました……」

「別の宇宙……管理外世界のことかね？」

護は首を横に振った。

「もつと遠い、時空の彼方に三重連太陽系がありました……。でも、もうすでに滅んでしまいました……」

辛そうに護は言った。

「遊星主はもともと、三重連太陽系を甦らせるために創られたプログラムなんです」

「三重連太陽系？」

「プログラム？」

「滅んだ……？」

隊長たちは理解できず、ざわついた。

「そうですね。遊星主について話す前に、すべての始まりからお話したほうが良さそうです」

護は、三重連太陽系の歴史を、己の宿縁に絡んだ物語を語りはじめた。

遠い時空の彼方の宇宙の、滅亡と再生の物語を……

かつて。

数多の世界が生まれ数多の文明が栄えた。  
しかし。如何なる世界も衰亡の運命を免れ得なかった。

……それは三重連太陽系も例外ではない。

紫の星。赤の星。緑の星。それぞれに高度な科学文明が咲き誇り、  
発達し繁栄した三重連太陽系。

その世界も紫の星で誕生した技術によって終焉を向かえる。

怒り、妬み、憎しみなどに起因する負の感情から発するストレスの  
波動…… マイナス思念。

紫の星ではマイナス思念を消去するためのプログラムが開発された。

プログラムとはある一定の目的を果たす為、人工的に創造された知  
性体の総称である。



マイナス思念浄化のため、Zマスターが創られた。  
だが、Zマスターは暴走し、紫の星を機界昇華してしまったのだ。

Zの力は有機物と無機物を融合させる生機融合が特徴である。マイナス思念を完全に消去するには、全知性体を機械に融合してしまえばよい、とZマスターは判断した。

かくして紫の星の住人はすべてZの力に取り込まれ機械と融合し、惑星全体が機界昇華により死の星と化して滅んだ。

Zマスターによる全有機生命体のゾンダー化。

この事に脅威を覚えた赤と緑の星では、各々異なるスタンスで、事態に望んだ。

「赤の星では、対Zマスター用の戦闘システムを構築した……」

その、護の言葉を本局からJが継いだ。

『ああ。指導者アベルはZマスターを迎撃するため、我々ソルダート師団を、そこにいるラティオの力をコピーした生体兵器アルマと超弩級戦艦ジェイアーク、艦の制御を司る生体コンピューター《トモロ》を誕生させた。これらの複合戦力をもってアベルは万全の体勢を整えた……はずだった』

「はずだった？」

『何もかも、間に合わなかった、という事だ』

ソルダートJは自嘲気味に笑みを浮かべた。それは苦い記憶であった。

『原種の侵攻は我々の予想を遥かに越えていた』

原種とは、Zマスターの分裂体であり、総数は31体。故に機界31原種と呼称する。

アルマはこの原種と対消滅する能力を持たされていた。いわば天敵である。

ソルダートもジェイアークもアルマを確実に原種のもとに送り届けるために作られたのだ。

だが。

それらは役目を果たす事もなく原種の急襲にあい、アベルの戦闘システムはあっという間に瓦解してしまった。

赤の星は機界昇華の為に滅んだ。

『私は……原種に破れ……原種の端末となった』

あの日のことをJは永遠に忘れないだろう。赤く染まる大地の上で胸に刻まれた、敗北した戦士の屈辱と絶望感を。

先に原種の行動端末ゾンダリアンとなっていたトモロが、Jにゾンダリアンとして生きるように勧めてきたあの瞬間も含めて……

Jは原種に命じられるまま、機界四天王の一員ピツァとして、数々の惑星を機界昇華に導いてきた。

そして。蒼の星地球において初めて彼は戦うに足るライバルに出会ったのである。

「僕が生まれた……緑の星も、やはり原種に滅ぼされた……」

護は緑の星の指導者カインの顔を脳裏に思い浮かべていた。優しげな風貌の、生前ついに会うことの叶わなかった、実の父の姿を。

「緑の星が滅亡の寸前、指導者カインは、息子であるまだ赤ん坊だった僕を、対Zマスターの切り札である宇宙メカライオン・ギャレオンと一緒に、遙かな宇宙に逃したんだ……」

赤の星が機界昇華されたのを知ると、カインは浄解能力……アルマが持つのも同じ力を持つて産まれた我が子、ラティオにすべての希望を託してギャレオリア彗星の彼方へと避難させた。そして自らは緑の星と運命を共にしたのである。木星決戦のさい、獅子王凱はカインの人格コピーと出会っている。

ギャレオリア彗星は赤と緑の星が開発した次元ゲートだった。ゲートは数百億の時を越えた太陽系に繋がっている。

そうして、ギャレオンとラティオは蒼の星地球へとやってきた。

当時、北海道旅行中であつた天海勇・愛夫妻は、この赤ん坊のラティオをギャレオンから引き取り、息子として育てた。

一方、原種もラティオを追って次元ゲートに侵入しようとしていた。彼らは尖兵としてゾンダリアン・パスターを地球に送り込んだ。

「天海夫妻はラティオという赤ん坊に護という名前をつけて、大切に育ててくれました。そして……その僕は普通の子供として生きてきました。自分が何者なのかも知らずに……」

だが。やがて運命の刻は廻ってきた。

小学三年生となっていた護は社会見学の途中、巨大ロボットの暴走に巻き込まれたのだ。

その巨大ロボットこそ、パスターの侵略が始まった証であつた。

巨大ロボットはゾンダーロボといい、ゾンダーメタルを人間に植え付けられて誕生する。

ゾンダーメタルは紫の星で開発されたゾンダークリスタルの亜種であり、人間のもつマイナス思念をエネルギーに変えて周囲の有機・無機物と融合を繰り返し成長を続ける。やがては負の感情からくる衝動に突き動かされ、破壊を行う怪物と化す。

パスターはゾンダーを増やし地球を機界昇華させようとした。

後にE I - 02と呼ばれるゾンダーロボの前に、護たちは死を覚悟した。

しかし。

「その時。この、凱兄ちゃんが助けに来てくれたんだ!!」

護は今でもはつきり覚えている。危機に陥った護たちの前に颯爽と現れた若きサイボーグの姿を。

それは、勇者との最初の出会いだった。

その青年　獅子王凱こそが、地球をゾンダリアンから守るために結成された、地球防衛勇者隊《GGG》の機動隊長だったのである。

護が言うと、皆の視線は凱に集まった。

「なんだが照れるな……」

凱は頭を掻きながら、GGGについて説明した。

命が彼の話をフォローする。

それは、歴戦の猛者である管理局の者たちでも驚愕せずにはいられ

ない、凄まじき勇者たちの物語であつた。

**KING OF DEVIL NanaoGaiGar Part 2 Episode**

テレビシリーズをさらっとおさらいしましょう  
( ・ )

西暦2005年。

獅子王凱は人類史上初めて地球外知的生命体とのファーストコンタクトを果たした。

当時。凱は高校生でありながら、有人宇宙船スピリッツ号のパイロットに選ばれ、宇宙へと飛び立つ。それは木星圏で消息を絶った母・絆を探す、第一歩になるはずのフライトだった。

……しかし、結果としてそれは、彼の肉体に重大な危機をもたらすことになる。

地球に飛来した謎の飛行物体。

地球外知的生命体……ゾンドリアン・パスターとスピリッツ号は遭遇したのである。

そして両者は衝突した。

この接触により、無惨にも機体はおろか、凱自身も深い損傷を負ってしまう。

その凱を救ったのは、鋼鉄の獅子の姿をしていた。

それは、天海夫妻にラティオを託したばかりのギャレオンだった。

ギャレオンはパスターと交戦し、東京湾に墜落。パスターは横浜に落下し甚大なる被害を地上に与えた。

日本政府はギャレオンを回収し詳しく調査を行った。そして数々の



オーバーテクノロジーを入手する。これがGGG結成に繋がっているのである。

一方、重傷を負い生死の境をさ迷う凱は、実父・麗雄博士からサイボーグ手術を受け一命を取り留めた。

麗雄博士はギャレオンから手に入れた異星文明の技術を用いて息子を救ったのだ。

特に、凱のサイボーグボディの維持は、緑の星が生み出した無限情報サーキット・Gストーンが無ければ不可能であつたろう。

Gストーン。

ゾンダーメタルがマイナス思念をエネルギーに変換するのとは逆に、あらゆる生物が持つ生命の源……プラス思念である『勇氣』をエネルギーへと変える。ラティオの力もまたこのGストーンが源泉にあった。

Gストーンは機械のジェネレーターとしても使用可能で、これまで実現が困難だった巨大ロボットの運営も夢では無くなった。

ギャレオンからもたらされた情報により、いずれ異星人の侵略があることを予期した政府は、対異星人組織を秘密裏に作り上げた。それこそがGGG《Gutsy Geoid Guard》地球防衛勇者隊である。

宇宙開発公団の総裁を兼任する不屈の男・大河幸太郎を長官に頂いたGGGは、Gストーンを利用した超エネルギー機関GSライドを搭載した巨大ロボットの次々に配備し、有事に備えた。彼ら巨大ロボットのたちは機動部隊の要であり、サイボーグとして蘇った獅子王凱が隊長だった。

その中心は竜神シリーズと呼ばれる一対のロボットたちで、それぞれ氷竜・炎竜、雷竜・風竜という。彼らは合体することでさらに強

大な竜神となるのだ。

他には諜報部に所属する隠密行動が得意なボルフォッグがいる。しかし。あまたの勇者ロボのなかでも、機動部隊の勝利の鍵といえるのは、G G最強の勇者王の他にないだろう。

護たちの前にゾンダーが出現した時、サイボーグ凱とギャレオンが救出に駆け付けた。

いかにサイボーグといえど、凱のみでゾンダーは倒せない。倒すにはギャレオンの協力が必要だった。

ギャレオンにはカインのためにフュージョンする機能が持たされていた。

凱がギャレオンの体内に収容・融合すると、システムが組み換わり、人型の形態へと変わる。即ち、メカノイド、ガイガーである。

ガイガーでもゾンダーに勝てない場合、長官の承認を得てファイナルフュージョンが行われる。

ステルスガオー、ライナーガオー、ドリルガオーの三機のガオーマシンとガイガーが一つになって誕生する勇者王。スーパーメカノイド、ガオガイガーである。

夢の島における初フュージョンを成功させたガオガイガーは、E I

- 02をたやすく撃破した。

だが、まだゾンダーメタルの知識がなかった凱は、摘出したゾンダーの核……ゾンダーメタルを素体ごと握り潰そうとした。

この時。天海護は己の力に覚醒した。

緑の光を放つ、羽を生やした妖精のような姿。護は無意識にガオガイガーの掌まで飛んで行き、ゾンダーメタルを浄解した。護の力で、ゾンダーの素体とされた人が、元に戻ったのだ。その能力を請われ、護はG G Gの仲間になった。特別隊員の扱いで、両親には内緒の、極秘の待遇である。

凱と護はゾンダーとの戦いを通じて絆を深め、素晴らしいコンビネーションでゾンダリアンの野望を挫いていった。

あるいは、二人はG ストーンで結ばれた兄弟とも言えるだろうか。

地球防衛の戦いはついに東京を舞台とした決戦に発展する。

パスダーと機界四天王と最後の戦闘。

凱は敬意すら抱きあったライバル、ピッツアと決着を着け、護の勇氣はゾンダーメタルプラントによって危機に陥った人々を救った。

しかし。

かろうじて勝利したG G Gだったが、新たに出現した機界31原種の奇襲で壊滅してしまう。

勇者王ガオガイガーも、原種により破壊された。

絶望した護の前に、一隻の戦艦が現れる。

阿蘇の火口より復活した光の翼。超弩級戦艦ジェイアーク。

そして護は行方不明だったクラスメートの戒道が、自分と同じ力を持つ異星人だと知る。

アルマとなった戒道は死の道を進んでいたゾンダリアン・ピッツアを、ペンチノンを浄解した。

本来の姿を取り戻したピッツア、いや、ソルダートJ-002は課せられた使命を果たすため舞い上がった。原種を殲滅するために。ジェイアークは敢然と原種に立ち向かうのだった。

一方。G G Gも国連の管轄下に移行して、新生G G G《Gutsy Galaxy Guard》宇宙防衛勇者隊となって再び立ち上がる。

地球軌道上のオービッドベースに基地を移し、宇宙空間用のスター・ガオガイガーなど、戦力を増強、ジェイアークも交えた原種との過酷な戦いに挑んだ。

原種は木星決戦において、全てのパーツが合体した完全体Zマスタ―となり、G G Gを苦しめた。

Zマスタ―は木星に眠る未知の超パワー《ジュピターX》を使い優勢に立つが、ジェイアークの捨て身の特効を受け、力の制御に失敗し、自滅とも言える形で敗れ去った。

とは言え、それでG G Gの戦いは終わらなかった。

G G Gオペレーター、卯都木命にかつてパスダーが植え付けた《機界新種》の種が覚醒し、命を素体に成長したのだ。

機界新種・ゾヌーダはゾンドリアンや原種を遥かに越える力を持ち、スターガオガイガーを苦戦させた。

ゾヌーダロボの物質昇華能力は凱を苛んだ。

熾烈な戦闘の果てに凱は愛する命と、共に死ぬ道を選ぼうとした。

ここでGストーンは大いなる奇跡を起こした。

護の浄解とGストーンの輝きは、命をもとに戻し、サイボーグだった凱を血の通った肉体を持つ人間に生まれ変わらせた。  
いや、それは普通の肉体ではなかった。

人間の限界を越えた超進化動力体。

超人エヴォリューダー。

それが獅子王凱が与えられた、Gの力の贈り物だった。

KING OF DEVIL

NanogaiGar

Part 2

Episode

今度はFinalおさらい

G G Gは死闘の果てに原種大戦を生き抜き、地球を救った……。だが、集結後に待っていたのは、友との別れだった。

天海護は言った。

宇宙のあちこちに、機界新種が出現しているかもしれない、ともし、ゾヌーダのような存在で地球みたいに滅びの危機に陥っている星があるのなら、その人たちを守るために戦いたい、自分の力を困っている宇宙の人々のために使いたい、と決意を語った。

少年の旅立ちを誰もが悲しんだが、しかしその意思を抑えようとする者は一人もいなかった。特に、最も彼を愛する両親すらも、護の意思を尊重し、許可してくれた。

そして、星降る丘の上で。

少年は将来を約束した少女や、クラスメイト、G G Gの仲間たちに別れを告げ、ギャレオンに乗って宇宙の闇へと駆け上がった。地球の平和を勇者に託して……。

だが。

護が旅立った理由は半ば嘘だった。機界新種が現れたから、ではなく、彼が宇宙を目指したのは、カイ

ンからのメッセージを受け取ったことが動機なのだ。  
嘘をついたのは両親を悲しませなくなかったからだ。息子は本当の子供ではない、いつか実の両親のもとへ、故郷へ戻っていつて二度と還っては来ないのではないのか。永遠に。天海夫妻はつねにそれを恐れていた。護は両親を安心させるため、必ず還つてくると、笑顔で約束した。とは言え実父であるカインに会ってみたいのも事実であつた。その人となりに触れてみたいと思つた。

凱からは、カインは緑の星と運命を共にした、と聞いている。ところが、数日前、カインからのメッセージを思いがけず受け取つたのだ。カインは生きている。ギャレオンに送り込まれた人格コピーは、はつきりと己の生存を訴えた。  
そして、カインは三重連太陽系の復興に、護の力を借りたいと申し出てきた。

失われた三重連太陽系を復活させるのに自分が役に立つのなら、と、護はカインの頼みに応じた。

そうして。護は次元ゲートであるギャレオリア彗星を抜け、遙かなる三重連太陽系に向かっていったのである。

一方。護とギャレオンが去つた地球では、国際的犯罪シンジケート《バイオネット》が俄かに活動を激しくしていた。

G G Gやシャッセルといった組織とバイオネットは対立を深めつつ、抗争を繰り返した。

流出したオーバーテクノロジーを利用するバイオネットは極めて危険な組織である。

そこで、G G Gはガオガイガーに変わる新しい純地球産の勇者王を



開発に着手した。

ガオファイガープロジェクトがそれである。

元バイオネットに所属していた天才少女アルエットの組んだプログラムにより完成したガオガイガーより安定した、ファイナルフュージョンが実現したのだ。

開発が最終に差し掛かったところで、命や機体がバイオネットに奪われるという事件が発生したが、香港決戦にて無事にガオファイガーは初ファイナルフュージョンを達成した。凱は再び勇者王としての力を取り戻したのだ。

ガオファイガーは次々にバイオネットの野望を粉碎していった……。

やがて、彼らの元に緑の髪の少年が帰還する。大いなる謎と新たな敵を伴って

カインの招きで三重連太陽系に到った護だったが、彼の前に姿を現した人物は、カインではなかった。

正確にはカインの人格を表面的に写しただけのペイ・ラ・カインであつた。

即ち、偽物だ。

それはソール11遊星主からの招待状なのだった。

偽物のカインも遊星主の一人と知り、護は愕然とする。

しかし、三重連太陽系の復活に手を貸してほしいという、遊星主の言葉は真実だった。

赤の星の指導者であり、遊星主を束ねるアベルの願いに、違和感を

覚えつつも、護は承諾した。

遊星主は元来、三重連太陽系の再生を担う守護神。Zマスターと同じ人工のプログラムではあるが、彼らが悪しき存在とは疑ってはいなかった。

それはとんだ間違いであると、すぐに思い知る事になる。

アベルは護にGクリスタルを破壊させるのが目的だった。

Gクリスタルは遊星主に懸念を抱いたカインが、対遊星主用に開発したアンチプログラムの母体である。ギャレオンは本来Gクリスタルの行動端末であり、フュージョンシステムも遊星主に対抗して造られた機構なのだ。

しかし、原種の侵攻によって急遽、システムはZマスター戦に対して再調整されて地球に送られたのである。

ギャレオンやGクリスタル、カインの遺産は遊星主用の切り札であるために、アベルには苦しい存在だった。

Gクリスタルから放たれるジェネシクオーラは、遊星主の身体を破壊する。彼らが乗り込むことは難しい……だったらカインの息子ラティオを使えばよい。

護を騙し、Gクリスタルを破壊しようと謀るが、その目論みは護に知られてしまう。

護はたった一人、Gクリスタルを拠点に遊星主と戦い続けた。その渦中、生死の貞かでないJや戒道と再会する。

そこで、彼らの口から護がいた太陽系が破滅に向かいつつある事を聞く。

全ては遊星主の画策によるものである。

遊星主は三重連太陽系を復活させるため、太陽系宇宙から暗黒物質を回収して利用していたのだ。

暗黒物質は目に見えない物質だが、銀河と銀河の間を支え、星々や生命の誕生する材料ともなりうる貴重なマテリアルだ。

もし、それが減少した場合、宇宙は収縮に向かうだろう。いわゆるビッグクラッシュと呼ばれる現象である。

遊星主により人為的に宇宙収縮現象が引き起こされ、結果護たちの宇宙の滅亡が早まる可能性があった。

護はなんとしても、遊星主の目的を阻止しようと決心した。

老いたる宇宙である三重連太陽系の復活と引き換えに、自分が育った宇宙を見殺しにはできない。

だが、戦力は圧倒的に遊星主が上回る。

戦局を挽回するにはG G Gの力が必要だった。

Jと離れ離れになり、戒道の安否も確認できない状況のなか、彼は信じた。必ずG G Gは来てくれる、と。

しかし。遊星主は巧妙である。彼らは地球に向かい、物質復元装置の核であるパスキューマシンを奪い去り、G G G艦隊を三重連太陽系に来るように仕向けた。そしてケミカル攻撃で隊員たちを無力化。唯一、戦意を持った凱をおびき出し、紙を引き裂くが如く、ガオフアイガーを打ち砕いたのである。

護、命、ルネらは監禁されていたJを解放し、ジェイアークに乗り込むも、操り人形にされた凱と戦うことになってしまう。複製体とはいうが、最強の勇者王と勇者ロボ軍団だ。

Jがフュージョンしたキングジェイダーは苦闘を余儀なくされる。レプリジン・ガオファイガーとの決戦。ゴルディオンハンマーの攻

撃で必殺のジェイクオースを失うキングジェイダー。絶体絶命の護  
たち。

だが、凱を信じる護と命の心が、奇跡を起こす。  
凱を操っていたケミカルボトルの呪縛を、二人の想いを受けて勇氣  
ある誓いを取り戻した凱が断ち切ったのだ。

この時。すでに、神話は始まっていた。

目覚めしギャレオンは、凱を己に相応しき勇者として認め、ジェネ  
シックオーラの力を与えたのだ。

勝利を確信していたアベルは焦りを覚えた。  
一時的に撤退するつもりだったのかは不明だが、彼女は三重連太陽  
系を照らす太陽……いや、物質復元装置たるピサ・ソールに自爆を  
命じたのである。

それにより時空間に歪みが生まれ、遊星主も凱たちも次元の狭間へ  
と吹き飛ばされてしまう。気がつけば、ミッドチルダの大気圏内に  
転移していた。

それが、次元世界に凱たちがやって来る経緯であった。

KING OF DEVIL NanogaiGar Part 2 Epis

ようやくお話 進められる……？

「……遊星主は故意に、この世界に来たのか。偶然飛ばされただけなのか。それは僕たちにもわかりません」

ただ、彼らが次元世界の存在を知っていたとは思えない。知悉していればなんらかのリアクションがあるはずだ。

「奴らは何かを企んでいる。絶対に」

凱は断言した。」が頷く。

「その、彼らと話し合いはできないのかね。知的生命体なら対話で戦うことの無意味さを伝えるのは」

「彼らは聞く耳を持っていないと思います。人間とは根本的に考え方が違うんです」

一年以上遊星主と戦ってきた護なれば実感できることだった。なにしろ、地球の命を虫けらのように嘲笑い、平気で自分達のイケニエにしようかという連中である。

アベルは三重連太陽系の再生に異常な程執着していた。目的の為に容赦なく破壊を行うだろう。それがプログラムであるソール11遊星主の存在理由なのだから当たり前といえばそうなのだが……。

「やはり、戦うしかないのか……」

「それでや」

はやては、ほんと、軽くデスクを叩き皆を見渡した。

ここからが本題だ。

「遊星主は今まで私らが相手をしてきた犯罪者とは違う、極めて強力な、別世界のロストロギアみたいな連中です」

未知の技術。しかも魔法ではない質量兵器のみの武装。  
さらに問題なのは、人間にある倫理感が欠如している点だ。

「凱隊長に聞いたところ、遊星主は人口の密集する地帯でも平気で破壊活動を行ったそうです」

それは、京都市街で起こったレプリジン・ガオガイガーとガオファイガーの戦闘のことである。あの時、ガオガイガーは一般人がいよ  
うが関係なく力を使おうとした。凱は逆に、どうすれば街や人々に被害を与えずに戦えるか考えながら動いていた。結局、建物以外の  
損傷は皆無だったが、一歩間違えれば恐ろしい惨劇になっていたはずである。そうならなかったのは、凱の判断とボルフォッグラGG  
Gの尽力があつたからだ。

ガオガイガーに搭乗していたのは遊星主パルパレーパに操られたレ  
プリジン・護であつたが、遊星主の意思の元に行われた破壊である  
にはかわりない。

「なんだと。それじゃあJS事件より酷い事態になるんじゃないのか！」

「しかも魔力を必要としない質量兵器のみだ。魔力素が存在しない世界では奴らが有利だぞ」「そんなのが管理世界のあちこちでテロをおこなえば……」

口々にざわめきが走る。

「皆さんのおっしゃる通り、遊星主の機動力は侮り難いものがあります」

はやては強い口調で言った。

「そこで、遊星主に対抗するため、私たち管理局の戦力を大幅に再編成したいと思います」

「なんだと……？」

「次元世界の治安を守るため特別に部隊を編成する計画です」

はやては、機動六課を中心にG G Gのメンバーを加え、陸と空を効率的に統合した部隊づくりの案を一同に提示する。

会議に居合わせた陸士部隊の隊長たちは、それぞれ複雑な相貌を見せた。

故・レジアス中将は空に対する憎悪を隠さなかったが、その薫陶もあってか陸の人間には空には非協力的な者が多い。

陸士隊は地上を守っているという妙なプライドがあるせいか、今さら空に媚びる態度はとりたくないのだ。

とは言え、プライドにこだわって民間人を救えなければなんにもな



らぬと、黙って会議を見守っていたゲンヤ・ナカジマは思った。

ここで彼は発言した。

「次元世界が危ねえって時に陸も空もねえ。ここは互いに協力し合わねえと、守るべきものも守れねえぞ」

師とも仰ぐゲンヤの言葉に、はやては意を得たように頷いた。

「しかし、空の意見も」

聞いてみないと、と誰かが言った。

これまで、空戦隊や航行部隊が地上部隊に援助をしてきた例は数少ない。レジアスは、なればこそ、地上部隊のみで強大な兵器の開発を非合理に行っていたのだ。

「それについては、次元航行部隊のクロノ・ハラOWN提督から、全面的な協力を約束してもらっています」

「あのクロノ提督か」

「「闇の書」事件の功労者ではないか」

さすがに彼の名前は陸士たちの耳にも届いている。

「空と陸をうまく連携させれば、遊星主の対処もやりやすくなるはずです」

はやての瞳は、つまらぬ自尊心など捨ててしまえと訴えていた。

陸士たちも意地を張る事にこだわっている場合ではないと、気づい

ていた。それにクロノの名が効いている。信頼できる人物だと、彼らにも伝わっていたからだ。

「みんな、わかってくれたみたいやね。それでは」

具体的にどういった部隊編成でいくのか、これから細かい案件を全員で詰めていく。

会議は白熱の色を帯びていった。

……そんな中。

一人、心ここに在らず、という表情をした者がいる。  
高町なのはがそれだ。

隣の席のヴィータは、深い憂いを浮かべたなのはを心配そうに見ていた。

「なあ、大丈夫か……？」

小声で囁いた。

「私はなんともないよ、ヴィータちゃん」

なのはは笑みを浮かべた。

ヴィータは彼女の身体を心配したのだと、思った。だが、ヴィータはむしろ、その心を気遣っていたのである。

無敵のエースは弱音を決して人前では吐かない。だけど、傷つかないわけではない。数年前の事故でヴィータはそれを知悉していた。だから、またなのはが無理をして壊れてしまうのではないかと、恐れた。

「大丈夫なら……いいんだけどな」

大事な会議の席では、ヴィータも強く言えない。それに励ますのな  
らもつと相応しい人が他にいる。

「うん、ありがとう。ヴィータちゃん」

もちろん。なのははずっと、奪われたヴィヴィオについて考えてい  
た。

今度こそ取り戻すはずだった、娘。

非情な遊星主のもとでどんな思いでいるのだろうか。  
泣いてはいないだろうか。

ヴィヴィオが苦しんでいる姿を想像すると、夜も眠れず、居ても立  
ってもいらなくなる。

パルパレーパの酷薄な顔を思い出しては、不安に陥った。

そんな彼女を、ヴィータだけではなく、シグナムやリインも、フェ  
イトも、痛ましげに見つめていた。

「遊星主に対する戦力としては、こちらだけでは不安や。だから、  
是非ともジェイアークが動けるようになればええんやけど……」

そこんとはどない？と、はやては本局に訊いた。

管理局本局には、運ばれたジェイアークの修復や分析等が急ピッチで進められている。ハード面に関しては、管理局の技術はなんとかクリアーできそうだが、シャーリーの報告では肝心のソフト面で手こずっているようだ。

『艦を再起動させるための生体コンピューターがブラックアウトしているため、メインシステムが作動しません』

アベルはジェイアークの動力機関であるジュエル・ジェネレーターを封じた。そのため、生体コンピューター・トモロ0771は停止を余儀なくされた。いわばサーバードウンに見舞われたのである。さらに、アベルは二度と創造主に逆らわぬよう、トモロを改造しようとした。

しかし、GG艦隊が息を吹き返し、凱が復活したことで作業は中断される。

アベルの手は免れたものの、ジェイアークは制御不可能となったまま次元世界に来てしまったのだ。

ソルダートJがその真価を発揮するためには、どうしてもジェイアークの復旧が必要だった。

フェイトはデバイスを用いてアベルの停止コードを回折・解凍できないかと、力を尽くしてみたが、如何にバルディッシュといえども簡単にはいかない。

「まいったな……」

はやてとしてはジェイアークの力に期待したいところなのだが。

「なあ、」

凱は焦慮している」に呼びかけた。

『なんだ？』

「もしかして、俺なら、ジェイアークの停止コードを解除できるかもしれない」

『なんだと！』

「そうか……！！」

命はオービットベースでの出来事を思い出した。

「凱なら……うまくいくかも」

「ああ。俺の エヴォリユダーの力ならば！」

『どういう事だ？』

凱は」やはやてたちに説明した。

原種大戦の後、凱が新たに獲得した、超人の力の事を。

「エヴォリユダーは全身の細胞がGストーンと融合した、超進化導力体！！」

「オービットベースの制御が国連に奪われた時も、凱がすぐにハッキングしてくれたから……私たちは地球圏を旅立てた」

コンピューターに神経系を直接繋がれるという能力には、皆も驚いた。

『だが、それは……Zの力だ』

Jは不信を漂わせた。

「たしかに。俺の能力は生機融合体……ゾンダリアンとほぼ同じだ。だが」

凱は右手を掲げて見せた。

鮮やかに、Gの紋章が浮かび上がる。

「俺の心まではゾンダリアンにはならない。なぜなら、俺の力の源はゾンダーのマイナス思念ではなく、勇気だからだ！―」

わかるだろう、と凱の瞳が言っていた。

『ああ。貴様ならば……ゾンダリアンのようにはならないだろう』

Jは認めた。かつてライバルとして戦い、Zマスターとは共に共闘した間柄だ。

その時に触れた凱の勇気は、本物だった。

『よかるう。貴様に任せてみよう、凱』

「よし。それじゃあ、凱さんには本局に向かってもらう」

はやてが決定した。

「会議が終わったら、すぐに行ってもらう。ええな？」

「わかった」

凱は頷いた。

「私も一緒に」

命がサポートを申し出た。

「じゃあ、命さんにも頼むわ」

「僕はここでギャレオンを見てるよ」

護はギャレオンの再調整を三重連太陽系で行っていた。そのシステムが次元間の移動で変調していないか、厳しくチェックする必要がある。

「よっしゃ。ジェイアークはお二人に頼むな。あとは、部隊の編成の計画を具体的に決めるだけだな」

はやての言葉に、隊長たちは厳しい顔つきになった。

『あ、ついでになのは隊長も来てもらえますか？』

と、シャーリーが言ってきた。

『レイジングハートさんの検査が完了しそうなんで……』

聖王のゆりかごでの戦いで、レイジングハートは奇妙な反応を示し

た。本人（？）は問題ないと告げたのだが、今まで見たことないような状態でもあったため、ジェイアーク共々、本局の技術部で検査を受けていたのである。

「それじゃ、なのは隊長は凱さんの護衛も兼ねて本局に向かって」  
「了解しました」

なのはは敬礼して命令を受諾した。  
そんな時。

『すまない。遅れてしまって』

本局から、クロノ提督が参加してきた。

「忙しいとこすまん。ちょうどこれから編成案について、話すところやってん」

『そうだったか』

クロノは改めて、会議に集まった面々に挨拶した。

（……なのは？）

クロノはなのはの表情を見て、怪訝に思った。  
彼もまた、ヴィータと同じように心配したが、とりあえずは会議に集中した。

対策会議は二時間以上に渡って行われ、終了したのはすでに太陽が中天に差し掛かった頃であった。



会議が閉会しても、局員たちの仕事は終わらない。むしろ、本当の意味での行動はこれからだ。

時空管理局全体が熱気を帯びたようになっていた。

そして。

対遊星主戦用に再編成された新部隊の名は、機動勇者隊《Riot

Brave Force》と命名され、はやてが指揮官として正式に承認を受けた。

再び、戦いの嵐に向かい、はやてたちは進もうとしている。

そのような、騒擾とも呼べるなか、なのはは一刻も早く、飛べる事を待ち望み続けた。

すぐにでも、レイジングハートをこの手に取り戻したい、と。

そう思いながら、なのはは凱と命が待つ転送ポートへと急いだ。

会議の翌日。

機動六課のある敷地には、訓練施設として陸戦用の空間シミュレーターがあり、様々な地形を再現できるのが自慢のひとつだった。

六課のフォワード、スバル・ナカジマは、街を写した訓練場の中に佇んでいた。

彼女の周りでそびえ立つビル群は、かつて魔導師Bランク取得試験の時やガジェット用訓練で見た風景を思い起こさせる。

スバルの出で立ちは、なのはとの訓練で着ている、動き易いトレーニングウェアだ。

一方、彼女と対峙している女性は、いつもと同じコートを纏った姿である。

ルネ・カーディフ・獅子王。

スバルの祖先がいた地球の出身で、ひょんなことからミッドチルダにやって来る事になった、数奇な娘だ。

朝焼けに照らされながら、二人は模擬戦の開始を待っていた。彼女達を見守る様に見つめているのは、スバルの相棒ティアナ・ランスターである。彼女はこの戦いの判定役にされたのであった。

フォワードの二人は交代任務の時間まで暇があり、やはり暇を持て余していたルネから模擬戦の相手を頼まれたのである。

元気だけは有り余ったスバルはすぐに承諾した。ティアナはしぶしぶといった顔で付き合うことにした。

シュミレーターの使用許可はわりと簡単に降りた。隊長陣の内、なのは、フェイトは本局に行っている最中で、シグナムやヴィータら副隊長たちはエリオやキャロを連れてクラナガン市内の警備を行っている。

夜まで、スバルもティアナもせいぜい書類仕事があるくらいだった。そんなわけで、動く事の方が得意なスバルは、ルネの申し出を歓迎した。

そもそも。ルネは、興味本位から本局に付いていったが特にやることもなく、サイボーグボディの検査に協力した後、ミッドチルダに戻ってきていた。会議等堅苦しい雰囲気は苦手だし、まだ警備でも手伝ってるほうがましだと思ったのだ。好きか嫌いかは別として、シャッセールのエージェントだったルネからすれば警護や捜査は慣れたものだった。

さらに、ルネは特別な訓練施設があると聞いて見てみたくなったらしい。この世界の人間と模擬戦をぜひやってみたいと、考えた。願いは叶えられた。

そして。

スバルは緊張感を表わにした貌で、ルネは無表情な貌で、ビルの谷間に立っている。

「あんたも、あたしみたいなサイボーグなんだってな……この世界じゃ戦闘……機人、て言うんだっけ？」

と、スバルに訊ねた。地球ではサイボーグは彼女一人しかいなかった。むろん、バイオネットは開発に躍起になっていたし、事実、何人かのメタルサイボーグと交戦した経験がある。

だが、完璧な意味でのサイボーグはやはり彼女だけだった。

「えっと、まあ、技術は違うみたいですけどね」

スバルはちよつと戸惑い気味に答えた。

「魔法なんてあたしらの世界にやなかったからな」

この世界のサイボーグは、自分と比べてどんな境遇なのだろうか。  
味方や敵組織から獅子の女王と呼ばれ、畏れられ、また忌まわれる、  
このGストーンサイボーグの自分とは……

「そろそろ、いきますか」

ティアナがおずおずとルネに訊いた。

「……ああ」

彼女が自分とどのように違うのか。それは拳を交えてみれば解るだろう。

「じゃあ、スバル。準備して」

「うん。マッハキャリバー、いこう」

スバルはペンダント状のマッハキャリバーを手にした。

《OK・buddy》

「それがあんたの「デバイス」か」

ルネは珍しげに、喋るデバイスを見た。

（GGGの、超AI搭載したロボットみたいなものか）

インテリジェント・デバイスについて、ルネはなんとなく、そう理解していた。

《Set·up》

待機モードからデバイスモードへ。

スバルの体を、白を基調にした防護服が覆っていく。

それは師であるなのはものを基にしたデザインと機能を持っていた。

腕に装着されたりボルバーナックルが駆動音を上げ、ローラーブーツに浮かびあがったGストーンのようなマッハキャリバーのコアが、朝の光を反射した。

と、同時にルネも形態を変えていた。

「イークイップ!!」

突き出した右腕のGストーンが輝く。

冷却コートが翼のように展開し、ルネの身体は戦闘モードにシフトした。

「ここんどこ、だいぶ鈍ってるから、力加減が上手くないかもしれないが、まあ勘弁してくれな」

と、冗談ともつかぬ事をフランス人は言った。

「は、はあ」

スバルは曖昧に答えた。

ルネの姿は獅子の事実の異名の如く、しなやかでありながら、力強さを感じさせた。

だが、スバルのやる気は掻き立てられたようだ。真剣な表情で拳を構えた。

「では」

ティアナはクロスミラージュを頭上に掲げた。

「始めっ！」

バアンと銃声と共に開始が告げられた。

「ウインググロード!!」

スバルは先天魔法を発動。

翼の道が、ビルに向かって伸びる。飛行魔法を使えないスバルが空中を移動するためには、必須の魔法であった。

「はあっ！」

ルネも跳躍した。ビルを駆け登り、スバルの元へ疾走する。

対バイオネット任務には銃器を使用するルネだが、スバルに合わせて素手で戦う。

第一、ルネが地球で使っていた銃器の数々は、次元世界では質量兵器として使用を禁じられている。ここでは、拳しか武器はないのだ。二人は明るくなっていた払暁の空へと跳ぶ。

尋常ではない、普通の人間を遥かに凌駕する、機械の体ゆえのポテンシャル。

Gストーンと魔法の力。  
サイボーグと戦闘機人。

生身を越えた能力の戦士たちが、風を裂いて渡り合う。  
その様子を判定役のティアナは、固唾を飲んで見守っていた。

（これが…… Gストーンの力。すごいプレッシャーを感じる！）  
「戦闘機人とやらの力、見せてもらうよ！！」

久々に暴れられるのが楽しいのか、ルネは笑みを浮かべていた。  
二人は天空で衝突した。  
跳躍の勢いをつけた上段の蹴りを、スバルへ叩きつける。

「くっ」

シールドで防ぐが、その衝撃力は凄まじいものだった。  
スバルはシールドごと横に吹っ飛ばされかけた。  
ルネはウィングロードを蹴って、すぐそのビルの屋上へ着地。床が砕け、破片が舞った。

「うおおおっ」

そこへスバルがリボルバーナックルを唸らせ突っ込んで来た。網拳の一撃を、同じく拳で迎い撃つ。

溢れるパワーが電光を生み出し、烈風が二人の周りを走った。二人は再び離れ、間合いをとろうとする。

スバルは後方へ跳び、ウイングロードでさらに上に行こうとした。猛追したルネはそこへ蹴りを繰り出す。

腹にヒット。飛ばされたスバルは、隣のビルの壁にぶつかった。

「ぐはっ」

追い撃ちを掛けようと、ルネがスバルを追っていく。スバルは地面に降り立ち、ウイングロードを作り出そうとしていた。

それよりも速く、ルネが弾丸のように上空から急襲する。かつて、バイオネットの鳥の獣人と戦った時に似ていた。最もそれは夜の戦いだっただが。

「はああああっ」

Gストーンが緑に輝いた。

「いくよマツハキヤリバーー!!」

ウイングロードを中断し、スバルは別の魔法を使う。

《N n u c k l e   D u s t e r》

魔力がりボルバーナックルに流れ込む。

強化された拳撃がルネの攻撃に打ち込まれた。



「うおおっ」  
「ひゃあっ」

スバルとルネは、衝撃に吹き飛んだ。だが、すぐさま立ち上がり、構える。

（まったく、タフねえ……）

自称凡人のティアナは、呆れるように二人の動きを追った。

戦いはさらに続く。

時空管理局。本局内の研究施設では、リインフォースIIとシャリオ・フィニーノが張り切っていた。

これほど楽しそうな様子は、スバルたちのデバイスを調整していた時以来だ。

シャーリーははやての命を受け、ここで新部隊の装備強化のために来ていた。リインはその手伝いだ。それとは別に、先日まで居たルネのメンテナンスデータも取っていた。戦闘機人とは異なる未知の機構について、分析と解明を行っている。

もちろん、凱のエヴォリユダーの肉体も検査の対象である。

二人は彼等のデータを元に、新しい兵装の開発を進めていた。

その一つは、今、シャーリーの目の前の培養槽に漂うデバイスたちである。

これまでに造られたデバイスとは機能やデザインがだいぶ違う。完成すれば、常識を覆すデバイスとなるだろうと、シャーリーは思った。

そして。

その中の一つには、《魔導師の杖》レイジングハートの姿も見受けられた。

待機状態のレイジングハート。彼女は何を想うのか。

その中心には、ぼんやりと緑の光が浮かんでいた。

「レイジングハート……新しき、私たちの希望……」

静かにリインが呟いた。

シャーリーは微笑して、

「さて、ジェイアークの方はどうなっているのかな？」

整備ドックのある方角に顔を向けて言った。

ミッドチルダ。

地上、陸戦用空間シュミレータ。ビルの街では二人の女性が戦っている。

サイボーグのルネのスピードはほぼ亜音速に達する勢いであり、スバルはその速度に追いつきながら反撃した。

ティアナの目には捉えきれぬ、高速戦闘だった。

生身を越えた身体能力ゆえの模擬戦。

ティアナは戦いの余波で飛び散った建材や攻撃の衝撃波から、自身を守るためバリアを張らねばならなかった。

「全く……二人とも、よくやるわよ」

ティアナは呆れてるのか、感心してるのか。ため息を吐いて戦況を見つめる。

「カートリッジロード！」

魔力カートリッジを一発消費。スバルの直射型魔法。

《Revolver Shoot》

射程距離が短いが、威力は抜群だ。

「来るか」

ルネは拳に力を入れた。

「いつけええ」

スバルは真つすぐ、ルネに突っ込む。

「おもしれえ」

ルネのGストーンが輝く。

「リボルバーシュート!!」

衝撃波をルネの体に打ち込む。ルネは拳撃で応ずる。

魔力にGストーンパワーが衝突し互いに噛み砕き合った。だが、魔法が相殺された時にはスバルは次の動きに出ている。スピードと体重を乗せた蹴り。ルネはそれを腹に受けた。だが、それは彼女の思惑通りだった。

「あいにく身体は頑丈でね!!」

がつしりと、スバルの脚を腕で掴んだ。

「わわっ」

慌てるスバルだが、ルネはサイボーグらしい力で、スバルを持ち上げた。

彼女は敢えて攻撃を受ける事でスバルの動きを捉える瞬間を作り出したのだ。

そして、ルネはスバルをぶん投げた!

「あひゃあああ」

悲鳴は風に引き裂かれる。

ルネは突進。

投げ飛ばされたスバルの前に追いつき、

「さっきのお返しだよ!」

蹴りを放つ。

サッカーボールよろしくスバルは遙か上空へ。

「これで最後だ!!」

跳躍し、渾身の打撃をルネは与えようとする。

自由落下により、不利な態勢のスバルは、だが諦めていない。

「マツハキヤリバー!!」

カートリッジロード。

「この一撃に賭ける!!」

《Yes·baby》

師であるなのは技を、見よう見真似で体得した魔法。

「デイベイン……バスター!!」

「うおおおっ」

ティアナが仰ぐ空の一角で、強力な力がぶつかり合った。

そして。

光が、弾ける。

一方。本局に無事着いたなのはたちは、ジェイアークが修復を受けているドックの方に向かっていた。宇宙最強の戦艦の威容に、なのはは圧倒された。いま、ジェイアークは着々と改修され、往時の様相を取り戻しつつある。

凱や命は、Jとの再会に顔を綻ばせた。

三人は、Jに案内されて、ジェイアークの艦橋へ歩いて行つた。

今回のイメージBGM

ベターマン（サンライズ制作）のアサミの解析シーンに使用された曲とか、たしかタイトルケミカルだったかなあ？

それと、GGGのJのテーマ、MADLAX（ビートレイン制作）のミステリー調（？）な曲とか……



時空管理局。

その本局は、次元の海のチョークポイントに浮かぶ巨大な建造物だ。次元航行艦隊の本拠地であり、次元世界を守る提督たちの基地である。

そして、艦船が収容されるドックに、異世界から来た白い艦が繋がれていた。

三重連太陽系に生まれた、超弩級戦艦・ジェイアークである。現在、ジェイアークは先の戦闘で受けた傷を修復中だった。

常ならば、光子を吸収して事故り修復できるのだが、動力をほとんど断たれているためにそれもままならぬ状態だ。

対遊星主用装備に腐心する機動勇者隊の八神はやて隊長は、本局に依頼してジェイアークの完全復旧及び改装を急いでいた。

次元世界に来たる前。

遊星主の首魁、アベルはジェイアークの動力を封じ、自らに従順な道具に変えようとした。

ジェイアークの艦長・ソルダートJが忠誠を誓うアルマ・戒道幾巳を使い、緊急停止コマンドをジェイアークに入力したのである。

動力源であるジュールジェネレーターを強制的にダウンさせられ、Jとジェイアークは力を奪われた。まさに翼をもがれた鳥にも等しい窮地に陥ったのだ。その後、ピサ・ソールの爆発に巻き込まれミッドチルダへと墜落したジェイアークであったが、時空管理局の手を得てやっとのことで修復の目処がたったと言えよう。

しかし、管理局の技術をもつてしても、ジェイアークを縛る停止コマンドを解除できず、艦体制御を司るコンピューター《トモロ》も目覚めない。とは言え、緊急停止コマンドを解除できるのはアルマか、創造主のアベルのみ。ソルダートJにとっては実に歯がゆい状況だ。

しかし。一人、ジェイアークを蘇らせられる可能性を持った男がいた。

獅子王凱。超進化導力体、エヴォリューダーの力を獲得した蒼の星最強の勇者。

その能力は生機融合と呼ばれる。即ち、機械と己の神経細胞を直接繋ぐ事で、人機一体となるのである。その能力あつたればこそ、勇者王ガオファイガーにフュージョンすることができたのだ。

そして、凱は地球を去る時の戦いの最中、国連の掌中にされたオービットベースの制御を、メインコンピューターにエヴォリューダー能力で侵入することによって見事、GG艦隊へ奪取させている。その実績から、凱はジェイアークの停止コマンド解除に協力すると名乗り出たのだ。

藁にもすがる思いでJは申し出に応じた。誇り高い戦士であるが、ジェイアークなくしてソルダートの真価は発揮できぬと心得ていたからだ。

かくして、凱は命と共に、高町なのは一等空尉の案内で時空管理局本局を訪れる事になった。

艦体外部の換装作業が進む中、凱はジェイアークのメインコンピュータールームに足を踏み入れた。凱も始めて知る、超弩級戦艦の中。トモロは沈黙したまま、奇妙な静寂に艦内は包まれていた。

トモロ・コンピューターの外板の一部を外し、複雑な回路を表わにする。

生体コンピューターの名の通り、有機的な趣の神経回路が内部に張り巡らされていた。

「よし。始めるぞ」

凱は右手をトモロの神経回路に当て、Gストーンを介して接続する。

「頼む」

」は祈るような口調で言った。

「我が友を、起こしてくれ」

「ああ」

頷いて、凱はアクセスに集中した。

「頑張つてね、凱」

はらはらしながら、命が見守っていた。

凱が作業を開始してからしばらくが経ち、不意に彼は苦い顔つきになった。

「アベルめ、厄介な置き土産を……」

「なんだと？」

「停止コマンドをどうあっても、解かれなくなかったんだろうな。《ペンチノン》の中枢部に入るルートに、恐ろしく複雑なロックを仕掛けていきやがったぜ」

決められた暗証コードを入力しないと、ロックは外れず、中枢にアクセスできない。それでは、ジュエルジェネレーターを復活する為に必要なコマンド解除が難しくなってしまう。

凱が、ジェネレーターを起動させるには、入り口を塞ぐ鍵を壊し、停止コマンド解除の為のパスワードを打ち込まねばならないのだ。管理局の技術者もなんとか方法がないか試行錯誤を繰り返したが、芳しくはなかった。

凱はアベルの意地の悪い微笑を思い起こした。彼女はよほど、ジェイアークを取り戻せないのが許せなかった様だ。

アベルはトモロが自分に反逆しないよう、改造を施すつもりだったらしい。かつてJに対して行ったように。

だが、途中で邪魔が入り、改造は中断された。

ひとまずジェイアークを無力化できたことに満足してその場を退いたのである。

後には翼を失った艦とソルダートが残った。

最も、Jに関しては一部、能力が回復している。フェイト執務官によるリカバリの魔法で、どのような理由が生じたのか、Jジュエルの機能が少しだけが甦ったのだ。

そこで艦のジュエルジェネレーターに治癒系の魔法をかけるのはどうかと、意見が上がったのだが。

万一、なんらかの副作用が生じた場合（例えば、暴走なり爆発なり、だ）を鑑みて、実行はされなかった。

したがって、今のところ、凱に頼むしか方途は思いつかなかったのである。

「これは、かなり時間がかかるな……」

凱は眉をしかめた。

中枢ルートに至るアクセス回路には、無数の暗証ロックが侵入者を防いでいたのだ。何重も設置された見えざる鍵は、数百桁の暗証コードを入力しなければ外れない仕組みになっている。凱は鍵の突破を一つ一つ、行わなければならない。非常に、骨が折れる作業だった。

「すまん。すぐには無理みたいだ」

「私の方こそ、なんの力も貸せず、すまない」

いつになく自信を無くした声でJは言った。自分の艦でありながら、何もできず、他人任せな状態に不甲斐なさを感じているのだろう。

「とにかく、頑張ってみるさ」

凱は不敵な笑みを浮かべ、アクセスを続けた。

彼の意識はすでにトモロの内部に入り込んでいる。

鍵で鎖された扉を開けるため、勇気を沸き立たせ、尋常ではない速度でコードを打ち込んでいく。

（アベルよ　　）

Gストーンが輝いた。

（いつまでも、お前の思い通りにはさせないぜ！）

全身の細胞に融合したGストーンの結晶が、彼に力を与えた。

（光の翼よ、今一度、戦士のために……羽ばたくために）

そして。朋友の想いに応えるために。

（目覚める！ 《ペンチノン》！！）

鍵が砕ける。凱は眠るトモロへ、一步一步、着実に近づいていった。

同じ頃。

なのはは、Gストーンの研究分析が行われているラボに来ていた。

「シャーリー、どう、進んでる？」

「なのはさん、いらっしやい」

機動六課ではロングアーチの纏め役を勤めた、眼鏡の女性局員シャリオ・フィニーノは、本局で新装備開発と、緑の星の技術について、その研究主任を任されていた。

アシスタントには、八神はやて隊長の融合騎・リインフォースツヴァイIIIIが手伝っている。

「なのはさん、おはようございますですう」

小さな妖精のようなリインの挨拶に、なのはは思わず顔を綻ばせた。

「おはよう、リイン」

笑顔で返すのはだったが、僅かにシャーリーは目元に翳<sup>かげ</sup>が射すのを見た。やはり、心では嘆きばかりが生まれているのだろうか。……

「なのはさん、レイジングハートさん、調整終わってますよ」

「もう、なんともないの？」

なのはの愛杖、レイジングハートはゆりかごの一件以後、不調を顕していた。六課隊員の中では真っ先にレイジングハートの修復・調整が行われていたのだ。

シャーリーは待機状態のレイジングハートをなのはに手渡した。その外見は赤い宝石のペンデルムフォーム。以前と変わらぬ慣れ親しんだ姿だ。

「お帰りなさい、レイジングハート」

優しい声でなのはが呼びかけた。正常に戻ったのを確かめるように。

《Master・It has slowed・Worry  
or I'm sorry for disregarding  
it.》

なのはは「貴女は悪くないわ」と、レイジングハートを慰めた。

「実戦には支障はないと思います。ただ、未知の機能に関してはつきりとはわかりませんが……」

「未知の機能？」

《Master……》

レイジングハートがいつもの冷静な声で、主に告げてきた。だが、なのはは、微かな戸惑いをそこに感じたような気がした。

《I seem to have acquired the ability to exceed an apparently usual device.》

「どういうことなの？」

「それには、まず、Gストーンについて説明したほうが良いと思います」

シャーリーの合図を受けて、リインが映像と数値データを示したディスプレイを宙空に立ち上げた。

「レイジングハートさんの制御機構には、微細なGストーンの欠片が癒着しているんです」

「ええっ!？」

なのはが驚いた表情になった。

「私達はずっと、Gストーンの性質を分析してきました」



「ここでの実験には、凱さんの細胞から培養して抽出した、微小のGストーンを用いていますう」

「調べれば、調べるほど、凄いですよ、Gストーンって」

技術に目がないシャーリーは、驚嘆の思いで語った。

「この拡大した画像を見てください」

と、映像の一つを指で示す。

Gストーンの結晶の表面を映し出したものだ。

緑の結晶体の内部に回路状の模様が浮かび、光が規則正しく脈動している。

「無限情報サーキット……護くんはそう言ってました。文字通り、数億語に換算される特殊な文字情報がGストーンには収録されていました。極小の結晶にです。まさに、情報の回路ですよ」

フェイトのバルディッシュに協力してもらい、文字情報の解析を進めたところ、緑の星の技術に関するデータを読み解いた。それによって、地球でも開発できたGSライドを、シャーリーも再現することができた。そして、ミッドチルダの技術を応用して、すぐに簡易のGSライドを完成させたのである。

「なのはさん。ほら、この映像のように、Gストーンの結晶に特定の電磁波を照射すると、安定させるのが難しいものの、莫大なエネルギーが取り出せます」

「すごいね……」

データでは、魔力に頼らずとも、巨大な機械を動かし、長期の維持が可能な高出力を生み出す動力機関が造れると、証明されていた。それは、次元世界では喪失した、驚異的な質量兵器の理論であった。

ところで、GSライドの実態については最初、護に従うジェネシックマシンを分解して調べる予定だった。しかし、凱の細胞からGSTーンが取り出せると判明してから、技術者の気が変わり、実験計画は多少、変更された。また、サンプルのGSTーンが豊富な為、実験は格段にやりやすくなったという。おかげで貴重な緑の星の遺産を壊されずに済んだと、護は胸を撫で下ろしたとか……。

GSTーンは細かく分割しても機能を失わないという特徴がある。おかげで様々な実験を試すことができた。

ミッドチルダにいるはやてのデスクには、数時間毎に子細な報告書が山のように届けられたのだった。

そうした結果に基づき、次にははやては新しい装備の開発を打ち出す。ゆりかご級やピサ・ソールにも対抗しうるデバイスと、最終兵器だ。シャーリー達はさらに忙しくなり、研究は昼夜を問わず、続行された。

作中の設定には、2ちゃんねるのガオガイガスレから拝借したものが一部ございます。  
ご了承ください。

かつて、遙か昔の次元で、一つの宇宙が滅亡の危機に頻していた。

古代ベルカが戦乱によって滅びたのとは違い、その宇宙は純然たる自然の法則から消滅に向かって進んでいた。

如何なる宇宙も年老い、やがては死んで新たな宇宙へと生まれ変わる。だが、三重連太陽系の人々はそれに抗おうとした。高度な科学力を持つ赤の星と緑の星。

彼らは共同で研究を進め、幾つかの成果を収めた。

そのひとつが、ギャレオリア彗星と地球人が呼んだ次元ゲートである。

数億年の距離を越えて異なる宇宙と三重連太陽系を繋ぐ技術だ。しかし、その使用法に関しては、赤の星と緑の星で意見が食い違った。赤の星は別の宇宙から物質を奪い、衰退していく三重連太陽系の宇宙を再生させる。緑の星は逆に三重連太陽系から若い宇宙に移住し、その人々と共存する道を模索した。

それから、赤の星は万が一を想定して三重連太陽系再生のためのプログラム（人工知性体）、ソール11遊星主を開発。しかし、緑の星ではその能力を危惧し、対策を密かに講じていた。そして。

二つの星が検討を続ける間に、紫の星においてゾンダークリスタルが開発されていた。

滅びゆく宇宙に不安と恐怖を覚えていた紫の星では、それからくるストレスの波動……マイナス思念を払拭するための機構として、Z

マスターというプログラムを創りあげたのだ。

だが。

それは結局、三重連太陽系の滅亡を早めただけであつた。

機界昇華を促すマスタープログラム、Zマスターが暴走……その分裂体である機界31原種は紫の星を滅ぼした。

この脅威に、赤の星は迎撃の用意を始めた。

有機体と機械を融合するZの力に対し、緑の星ではその抗体たるラティオが突然変異的に誕生する。父親であるカインは、その力をコピーしたGストーンを創り、赤の星にも技術供与を行った。

赤の星のアベルはGストーンの理論を基にJジュエルを開発。高出力のエネルギー発振体としてサイボーグ戦士ソルダートと戦艦ジェイアークの動力源に使われた。一方、原種への切り札には、アベルのクローン体にラティオの能力を与えた生体兵器、アルマを創造。

原種に対応した31組の艦隊を配し、戦いに備えた。

アベルの計画は結局、挫折する。

原種の急襲により、ジェイアーク艦隊はほぼ壊滅、赤の星は機界昇華に散った。

緑の星のカインは、赤の星の滅びを察知すると、それまで遊星主用に開発していたジェネシック・ギャレオンを対原種用に調整し直し、我が子を託して若い宇宙に逃した。直後、緑の星は機界昇華された。カインらには原種に対抗するだけの戦力はほとんど残っていなかったのである。

しかし、希望は忘れなかった。ラティオが生きている限り、原種は宇宙を機界昇華できない。

希望と共に、ラティオと、ギャレオンと、数々の技術は若い宇宙にある蒼の星、地球へともたらされた。

ギアレオンに積まれたGストーンにも絶対量がある。だが、微細な欠片でも機能を保つ性質のおかげで、GGGは各国機関に譲渡しても欠乏することはなかった。

それであれば、例えば中国GGGの雷龍・風龍、フランスGGGはポルコート、光龍・闇龍等の勇者ロボの独自開発はできなかったであろう。

ともあれ、シャーリーは同じように分割したGストーンを用いてGスライドを組み込んだデバイスの試作品を幾つか製作し、その中にはレイジングハートやバルディッシュも含まれていた。

さて、シャーリーはGストーンがどのように誕生したのか興味を抱き、分析に勤しんだ。

ソール11遊星主パルパーパは、ゆりかご内にてロストロギア・レリックを「ジュエルに似た物体と指摘した、という。

結晶体に流したエネルギーを共振・増幅し莫大な推進力に変換する超技術。科学と魔法の違いはあるが、似通った性能があるのは確かだ。

ジュエルシードやレリックは、本来は数個のユニットを揃えて儀式を行わないと発動しないし、扱いにも難がある。しかし、そのパワーは空間に歪みを穿ち、次元震を引き起こす。あるいは超巨大戦艦の動力になる。とは言え、おいそれとは使えない術である。

比して、Gストーンは単なるエネルギー発振体ではない。

無限情報サーキットという異名通り、Gストーンには緑の星の技術データが保存された記録媒体ともなる宝石なのだ。

管理局は未知のオーバーテクノロジーをそこからかなり引き出していた。

ロストロギアは魔力媒体だが、三重連太陽系のGストーンは感情が

力の源となっている。

レリックの小型版である「ジュエル」は高出力発振体であり、空間から取り込んだ光子を圧縮してエネルギーに変換していた。Gストーンの場合は勇気をエネルギーに変換する。プラス思念というエモーションナルな波動を力に換えるのだ。

それゆえに、勇気が満ちている限り、生み出せるエネルギーは無限大になる。魔導師のリンカーコアですら有限なのだから、その特性はデバイスの能力を越えて余りある。

こうした機構を解析して応用できれば、新しい進化したデバイスが開発できるはずだ。

はやてはそこに目をつけ、シャーリーに新技術による機器の設計に着手するよう命じた。

任務をこなしながら、シャーリーが興味をそそられるのは、Gストーンの起源についてである。

ギャレオンや護からは断片的な情報しか入手できなかった。それであれこれ想像を巡らすのだった。

まず、結晶体機関を感情エネルギーで制御する技術は、早い段階で確立されていたとおぼしい。マイナス思念をエネルギーに変換するZメタルは、赤と緑の星双方の雛形となったであろう。三重連太陽系末期には、アベルはGストーンをもとにより恒常的にエネルギーを供給できるラウドGストーンを開発していたと考えられる。

緑の星のカインはアベルの企てをどれだけ感知していたのか。もはや知る術はないが、彼が粛々と緑の星の為に行動していたのは確かだろう。

遊星主戦を想定していたギャレオンは原種用に改装を受けたが、そ

の母体たるGクリスタルとジェネシクマシンはひっそりと隠匿され封印を施された。

Gクリスタルこそ、Gストーンの原石。

遊星主のアンチプログラムを構成する一部だ。

ラティオの力をアベルは生体兵器アルマに付与したが、カインはGストーンという結晶体に刻みつけた。

勇気をエネルギーに変える、生命の宝石、Gストーン。

シャーリーはそれがただの結晶体には思えなかった。

Gストーンが感情をエネルギーに変える媒体なのは、文字通り生きている宝石だとしたら？

遊星主対策として造られたGクリスタルに、ゾンダーメタルの抗体であるラティオ「護」の力を新たに付加されたのがGストーンといえようか。

機界昇華に抗う、足掻いてもがく緑の星の生命の、生の力の結晶。

まさしく。命の宝石は緑の星の人々の命をもとにした結晶だとしたら？

もしも、だ。

浄解能力を持って生まれたのが護一人だけではなかったら。

シャーリーはそう、仮定して自説を披露した。

緑の星の危機に、突然変異的に浄解能力者がたくさん誕生していたとしたら。

その人々の命をGストーンの中に封じ込めたとは考えられないか。



分析により、Gストーンの結晶構造が有機生物の幹細胞に似ていると判明している。

浄解能力を宿した緑の星の人々の細胞が、Gストーンのコアに使われているのではないのか。

Gストーンはいかに細かく分割されても、独立した機能を維持しているが、これは原始的な単細胞生物の細胞にうりふたつだった。凱の検査で明らかになった、Gストーン同士がリンクしあう現象も、細胞の生命活動を惹起させる。

Gストーンは、生きているのだ。

緑の星の人々の命、勇気を結晶内部に閉じ込めた。

原種の侵攻にも、最後まで諦めなかった人達の遺志と魂を、カインはGストーンのパワーの源として封じ込めたのだ。

それゆえに、Gストーンは使用者の生きる意思、勇気というプラス思念に共振し、熱いエネルギーに換えるのだ。

滅んでなお、緑の星は希望を捨てていない。

結果的に彼らの希望　天海護は、Zの力を倒す事に貢献した。

今もって、緑の星の人々の想いは、Gストーンと共に生き続けている。シャーリーはそんなふうに思った。

（Gストーンは、絶望に抗う希望の結晶……）

真に勇気を持つ者に無限の力を与える、輝ける宝石。

そう。

レイジングハートもきつと……

（きつと、なのはさんを絶望の淵から希望へと導いてくれる）

「Gストーンは本当に凄いんだね」

シャーリーの解説になのはは感心したように言った。

「ええ。それで、レイジングハートさんなんですが……」

「未知の機能って、どういうものなのかな？」

「Gストーンの特徴で、カートリッジよりも大きな力が引き出せる  
はずです。それと、Gストーンのエネルギーを衝撃波として撃ち出  
せると推測されます。また、他の機器との相性とかも上がっていま  
す」

「あくまでも推論だね？」

シャーリーは頷いた。

「実際に起動してみないと、わかりません。カートリッジシステム  
を組み込むのとは訳が違いますから……」

なにしろ前代未聞の、質量兵器の技術だ。試してみないことには、  
正確なデータは掴めない。また、上記以外の能力も獲得している可  
能性もあるし、逆に劣化してしまった機能もあるかもしれない。

「そこなんですが。なのはさん、ちょっとテストをしてみたいん

ですよね。ご協力お願いできませんか」

「うん。いいよ」

なのはは、承諾した。

「それでは、三十分ほどテストの準備をいただきますね。用意が整ったらご連絡しますから、訓練室に来て貰えますか？」

「了解。じゃあそれまで、休憩室にいるから」

「はい。よろしくお願いします」

そうして、なのはは研究ラボを出て、休憩室に向かって行った。

シャーリーはさっそくラインと手分けして、シュミレーションテストの準備に取り掛かった。

レイジングハートの新たな力がどのようなものなのか。

実に楽しみであった。

KING OF DEVIL

NanoGaiGar

Part 2

Episode

一部もあと少しです。

K I N G   O F   D E V I L

N a N o G a i G a r

P a r t 2

E p i s

今回のイメージBGM

魔法少女リリカルなのは

「この広い世界に」

他

時空管理局フェイト・T・ハラウン執務官は、ジェイアーク艦内で獅子王凱の作業を見守っていたが、どうやら自分では力にはなれないと思い、外へ出た。卯都木命とソルダートJはジェイアーク内に残った。

一息入れようと、フェイトは休憩室へ向かう。

休憩室に入ると、テーブルになのはが一人、放心気味に座っていた。いつもの彼女とは違う、元氣のない姿。

フェイトの心に重いものが広がった。

なのはの手もとには、コーヒーを容れたマグカップが置かれている。湯気も立っており、とつくに冷めているようだった。中身は減っている様には見えないから、恐らくほとんど口をつけていないのだろう。

憂愁に沈む顔を見て、フェイトは既視感とともに、スカリエッティ事件の渦中を思い起こした。

ヴィヴィオがさらわれた六課攻防戦の後。残骸の中に打ち捨てられたぬいぐるみが、どれほどなのはに衝撃を与えたか。

内心の感情を滅多に露にする事が無かった、厳格な教導官の彼女が……フェイトの前で、激しく泣きじゃくった。

こんな取り乱したなのはを見たのは、重傷を負った時の事以来だっ

た。

幼なじみのフェイトだからこそ、胸のうちをぶちまけられたのだらう。

フェイトは静かになのはを励まし、行くべき方途を示唆した。再び闘志を奮い立たせたなのは、ヴィヴィオを奪還する為に、勇躍して《聖王のゆりかご》へと飛んだ。

だが。ゆりかごは遊星主の介入で崩壊し、ヴィヴィオはなのはの元へは還って来なかった。

遊星主はヴィヴィオを連れ去り。  
絶望がまた、なのはを苛んだ。

フェイトは無言でカップを手に、なのはの隣に座った。

「フェイトちゃん……」

か細い声が友人の名前を呼んだ。  
フェイトは胸が痛んだ。そこにいたのは歴戦の航空魔導師ではなく、娘を奪われたか弱き母親の姿だったから。

……でも。なのははただの母親じゃない。

フェイトはそつと手をなのはの手に伸ばした。  
自分の力を与えるかのように。二人の指が触れた。

「うっ、くっ……」

ぽろりと、滴がなのはの頬を伝った。

「……なのは」

「私……また、助けてあげられ……なかった……今度こそ、って、決めたのに」

「しっかりして、なのは」

震える肩を、フェイトが抱いた。

こんなに小さな肩だったのかと、フェイトは驚いた。

「何が、エース・オブ・エースだ。娘一人救えないんじゃない……私、母親を名乗る資格なんて、ないよ！」

「そんなふうに、自分を責めないで」

「どうしてなの……」

どうして、私は魔導師で、ヴィヴィオは聖王なの？

「娘と普通に暮らす、そんな家族で居ただけなのに……私……っ」

ただ、それだけでいい。ささやかに。穏やかに、親子で笑いあって過ごすだけでいい……。

小さな願い。

潤む瞳から、涙が溢れた。



フェイトが涙滴をそっと拭う。

「泣かないで」

泣かないで

なのはが悲しむと私も、悲しいから……

なのはには、悲しむ顔は似合わないよ

かつて在った、あの別れの日の様に。フェイトは想いを込めてなのはを抱きしめた。

「エースは、こんな時に泣いたりしないよ。なのは」

「フェイト……ちゃん」

腕に力が入った。

「そうだね。なのは一人だけならヴィヴィオを取り戻すのは難しいかもしれない。だけど」

だけど。

「なのはには力を貸してくれる仲間がいっぱいいる。私やはやてだけじゃない。フォワード達ももう充分闘える。GGGの人達もついている」

みんなが、なのはの味方なんだよ

「ヴィヴィオを救いたって気持ちには私も皆も、なのはと変わらな  
いんだ。一人でしょい込む必要はない。私達みんな、ヴィヴィオ  
を助けよう」

「うん……」

なのはの目に生気が戻ってきた。

「そうだね……フェイトちゃん……。私、間違ってた」

全部、自分一人で解決しようとしていた。でも、それは誤りだ。頼  
もしい仲間と一緒に、遊星主に挑むべきだった。  
あれだけチームワークの重要さをスバル達に教えてきたのに……私  
ったら……本当に

「ありがとう、フェイトちゃん」

迷いを吹っ切った表情に、いつものなのはを見て、フェイトは微笑  
した。

「GGには憲章があるそうんだけどね、その五条にこういう文  
言があるの」

凱から教えて貰った言葉である。

「曰く　GG隊員は如何なる困難な状況に陥いろうも、決して諦めてはならない」

「……豪快な決まりだね」

「そう。諦めなければ、必ず苦境を打破できる……そんな思いが込められた文言だと思う」

親友の言葉に、なのは力が湧いてくるのを感じていた。

「私達も諦めずにいこう、フェイトちゃん」

「うん。もしなのはに酷い危機が襲い掛かってきても……私が命を懸けてなのはを護るよ。絶対に」

最後の時に母さんにはできなかった事を。

親友が翼を失いかけた時に覚えた後悔を二度と繰り返さない為に。

「　私も」

「一緒にヴィヴィオを、助けよう」

フェイトが目細めて

「きつと」

力強く、頷いた。

なのははレイジングハートを胸元から取り出した。

「レイジングハート……行こう、新しい力を試しに」

《All right・My Master》

「レイジングハート、再調整はうまくいったのね」

「シャーリーは未知の能力があるかもしれないって言ってた」

「そうなんだ。私のバルディッシュにもGSライドを組み込む予定なんだ」

「でも、まだ試作段階だよ、大丈夫かな」

フェイトはくすりと笑って

「カートリッジを組んだ時だって大英断だったんだよ」

管理局の歴史で、レイジングハート・エクセリオンとバルディッシュ・アサル트는、ミッドチルダ式に初めてベルカ式を組み込んだ事で、近代ベルカ式デバイスの端緒を拓いた機種だった。

「バルディッシュも、承諾してくれたし。これから設計をつめる予定だよ」

「大変だね、フェイトちゃん」

「それより、早く行かなくていいの？ シャーリー達、待ってるんでしょ」

「そうだね。じゃあ、フェイトちゃん。またあとでね」

「いつてらっしゃい、なのは」

なのはは休憩室を後にして、訓練室へと向かっていった。

なのはと入れ替わる様に、「J」がやって来た。  
フェイトはマグカップ片手に、寛いでいる。

「立ち直ったようだな。お前の友は」

「聞いてた？」

やや、「J」は躊躇いがちに、

「すまん。盗み聞きするわけではなかったのだが……」

と謝った。

二人はそれ程大きな声で喋っていたのではないのだが、サイボーグの聴力は、壁越しでも会話の内容を聞き取れたのである。しかし、たまたまとは言え他人のプライベートをのぞきみた気分がいい気持ちではない。

「別に機密事項を話してたんじゃないし。気にすることはないよ」

弁解口調の」を可笑しそうに見ながら、フェイトは答えた。

「友人を慰めてただけなんだし」

「そうか」

」は安堵したようだ。

「なのはは以前にも、あんなふうに落ち込んだことがあったんだよ」

「ふむ……」

「こういう時は、私の方が強いからね。だから励ますのはたいいてい私の役目なんだよ。もつとずっと昔は、逆だったんだけどね……」

子供時代を思い出しながら、フェイトは双眸を伏せた。

「お前達の絆は、よほど深いのだな」

数日間の付き合いだが、それだけでも六課隊長陣の友誼の強さが窺い知れた。

「小さい頃からの幼なじみだからね」

フェイトは過去を想起する。過ぎ去りし、遥かな思い出を。

KING OF DEVIL

Nanogagar

Part 2

Epilogue

あとむしり

イメージBGM

魔法少女リリカルなのは

「なまえをよんで」

「Little Wish」LyricallStep」

勇者王ガオガイガー

「ソルダート」

「ガイ」

聖闘士星矢

「夢旅人」インストメンタルBGM

他

設定は小説版に準拠。オリジナル設定もあります。



「本当の最初は、友達じゃあなかったの」

フェイトは、ジュエルシード探索の為、地球      第97管理外世界  
に降り立った時の事を話しはじめた。

「初めて会った時、私達はジュエルシードを巡るライバルだった…  
…」

邂逅は月村邸の広大な庭園。ジュエルシードを手に入れる為に、フェイトは敵対する態度をとった。

「でも、最後までなのは「友達」になろうとしてくれて……こうして今の私がいる      」

フェイトは管理局に保存された、概要を伝えるファイル呼び出した。クロノ提督の妻エイミィが編纂したPT事件の報告書である。そこに詳しいいきさつが載せられている。

「はざつと、目を通した。」

そして、自分の過去の過ちを胸襟を開いて話してくれた彼女に対し、敬意を覚えた。

「私も、同じだな」

機界四天王「ピッツァ」だった頃の記憶を掘り起こした」が呟いた。

「凱と出会った時、私と奴とは倒すべき敵同士だった……」

勇者王とゾンダリアン。己の存在を懸けた闘いを通して、獅子王凱とピッツァ（ソルダートJ）は互いの力量を認め合った。彼らは、初めて全力を以ってぶつかり合った、好敵手だったのだ。

（どこまでも諦めぬ真っ直ぐな心と強さ……ゾンダリアンだった私に「戦士の魂」を思い出させた男……）

東京決戦のなか、好敵手を救ったピッツァは消滅する直前。覚醒したアルマ（戒道幾巳）により浄解を受け、ソルダートとして復活した。戦った者達の勇気が、正しき道へと導かせたのだ。

「アルマとてそうだ。戦士としての使命を取り戻した当初は、ラテイオに対して排撃的な態度を取っていたからな。……目的は同じなのに、ゾンダーや原種の浄解を競い合っていた」

「へえ。護も私となのはみたいだったんだね」

そういえば、護の年齢はPT事件時のフェイト達と近い。幼くして力を得た子供の宿命のようなものなのかもしれない。

「もちろん、今は「地球人の友達」としてよき友人同士になっているのだから」

Jはまるで戒道の親のような顔で言った。立場的には、ソルダートはアルマに従属するのだが、しかし、Jは彼を単なる主とは見ていない。出来れば、戒道には人間らしい平穏な暮らしを遂げさせてやりたいと思っていた。

「そのアルマって、今は遊星主に捕まっているんだよね……？」

フェイトは聞いちゃ悪いかな、と思ったが、つい口に出してしまった。

「ああ。アベルはアルマを、ピア・デケムに接続している。生体コンピュータの代わりに、な。そうすれば私には攻撃出来ない思い込んでいる」

「は屈辱に震えた。

ピア・デケムを攻撃する事はアルマを傷つける事を意味する。だが、奴らを倒さないわけにはいかない。アルマの為にも。

「心配だね。ヴィヴィオだけじゃなく、アルマって子も……」

「なのはの気持ちは、私もよくわかるのだ」

正直に「は打ち明けた。

凱の前では決して吐露される事のなかった、彼の不安。なぜだろう。フェイトには話してもいい気がした。

「アルマはZマスターと戦い抜いた戦友として、大事に思っている。ソルダートとして、命を懸けて守るべき者だ」

だが。遊星主に敗北を喫し、一度はアベルに再改造を受けそうにもなった。戦士の誇りは冷淡な創造主に踏みにじられるのである。「は再改造に屈する事はなかった。そして、彼の位置を発見した護は、彼の言葉に従いジェイアークを解き放ちに赴く。その時、「は小さな護の背中に、真の勇気を看た。絶望的な戦いでも揺るがぬ意思で戦おうとする姿に、蒼の星の勇者達が交わした「勇気ある誓

い」が強烈に印象づけられた。

「ジェイアークに向かったラティオは、交戦中のアベルから、アルマを救おうとした。……私はラティオの救助を拘束されながら待っていた」

だが。護は結局、アベルを出し抜けず、戒道は敗れ、拉致されてしまふ。

そして、勇者王ガオファイガーがパルパレーパにより叩き潰されたのは、それからすぐの事だった。

「は勇者達の敗北の後、ルネ・カーディフ・獅子王によって戒めから解放された。

ラティオの導きで」はようやくジェイアークを浮上させ、反撃の糸口を掴んだ。

それからレプリジンの勇者王ガオファイガーとの死闘を繰り広げたキングジェイダーは、アベルの策に巻き込まれ次元世界にやって来る事となったのは、フェイトも知るところだった。

「ラティオは本当に強い。パルパレーパのケミカル攻撃から凱を救い、そしてこの世界においても懸命に行動している」

「は賞賛しながら、

「私も「勇気ある誓い」を共有してラティオ達と共に戦いたいと……そう思った。ふっ、孤高の戦士と気取っていた、この私が、だ」

と、照れた様に」は笑った。

「それはとても良い考えだと思うよ、私も」

フェイトは微笑んだ。

「友達がたくさんいるのは、何にも勝る武器だよ」

「ああ。仲間が入れば遊星主とて恐れるに足らんさ」

虚勢ではなく本気でそう思えた。ふと、獅子の魂を持つサイボーグの顔が脳裏に浮かんだ。彼女は劣勢の中でも闘志を喪失する事がなかった。隣にいた自分も戦意を無くさなかった。むしろ高揚感さえ感じていた。その時の気持ちがあればいかなる敵とも戦える。

「あとは、凱がペンチノンを目覚めさせてくれるか、だな……」

ジェイアークさえ復活すれば、」は再び空を飛べる。  
アルマを取り戻せる。

「まだ、作業は終わってないみたいだけどね」

時間がかかり過ぎれば致命的かもしれない。しかし、今はエヴォリユダーの力を借りるしか、有効な手だてが他にない状態だ。

「頼む、凱……」

気をもむ」に、フェイトが訊いた。

「……」、怖くはない？」

「何を、だ？」

怪訝そうに問い返した。

「アベルよ。いくら非道な人でも、貴方の創造主なんでしょう？」

そう言うフェイトの胸には、最後までスカリエッティへの忠誠心を捨てなかった戦闘機人達のが去来していた。

「アベルはもはや私が知っていたアベルではない」

赤の星を必死に守ろうとした、気高き指導者とは、あまりにも掛け離れた高慢な態度には、嫌悪感しか沸いてこない。

「確かにアベルは我々ソルダート師団の創造主だ。だが、今の狂った奴には仕える気は起きん。私はあくまでアルマの守護者なのだから」

「そう……」

フェイトは母・プレシアを思い起こした。かつての自分には、創造主に対してそこまで言い切れるものがなかった。どれだけ辛くても母を愛し、痛みに耐えていた。今から思えば、盲従するより、「J」の様に振る舞い、母に過ちを犯させない様に尽力すべきだと、後悔を感じていた。無論、どう悔やんだところで過去は修正できないし、母はやはり、アリシアの為に暴走を続けただろう。でも、もしかしたら……

フェイトは息を吐いた。堂々巡りに陥っても心は重くなるばかりだ。

「ソール11遊星主は、古き考えに妄執する不完全なプログラムだ。現実を受け入れず失われた過去に逃避するだけの」

そのために地球の全生命を滅亡させようというのだから、人類からすればたまったものではない。

「例え、三重連太陽系が再生したとして。本当の意味で我らの故郷と呼べるものなのか。ほんの少し寿命を巻き戻しただけの、まやかしの故郷ではないのか……」

蒼の星を滅ぼして再生した三重連太陽系に、なんの価値がある？と、Jは自問した。他種族を利己的に消滅させようとする遊星主は、Zマスターとどう違うというのだろうか。

「むしろ、緑の星のカインの様に、地球人との共存を計るべきではないのか」

護は、カインの目的は、次元ゲートを越えた世界で、共に生きることとで三重連太陽系の命を繋ぐことだと語った。

「私はGGGとの共闘を通して、その選択こそ正しかったのではないかと思った」

「でも……三重連太陽系の再生が遊星主の目的なら、彼らはこの世界で何をするつもりなんだろう」

「わからん。が、三重連太陽系を再生させるためなら、容赦なくこの世界を破壊しようとするだろうな」

それは地球での活動を見てもわかることだ。アベルの固執する三重連太陽系の再生には、どうしても別の宇宙から暗黒物質を奪う必要があった。奪われた方の宇宙は収縮に転じ、

本来より早い速度で消え去る。

もし、それがこの世界でも起こったら……。そのシナリオに、フエイトは恐怖を感じた。

「遊星主は、放っておけないね」

生まれた世界が違うフエイトには、アベルの蠢動が不気味に思えて仕方がない。

おとなしくしているだけなら干渉もしないし、三重連太陽系に還りたいだけならば、協力してもよいだろう。

もし、何らかの企みでミッドチルダを攻撃してくるのなら、時空管理局は総力を挙げて防衛しなければなるまい。

いや。そうした有事を想定して、機動勇者隊は編成されたのだ。

「カインの遺産……ギャレオンと、ジェイアークが元に戻れば奴らとも互角に渡り合えるはず。ジェネシックとキングジェイダーならピア・デケム・ピットにも遅れをとらん」

「頼もしいじゃないの」

「そのために、一刻も早くジュエルジェネレーターを起動させてくれないと、な……」

「は、ジェイアークのある方角に視線を向けた。そこでは、凱が頑張っているはずだった。

「頼むぞ、勇者……」



」は祈りにも似た呟きを、口にした。  
フェイトも、戦士の焦燥感が早く癒されるように願っていた。

ジェイアーク艦内。

獅子王凱はアベルの置き土産に苦闘していた。

「くそつ。これで二百は潰したはずだが……まだ出てきやがる」

毒づく凱に、命は心配そうに声をかけた。

「大丈夫、凱……？」

「ああ。今のところはな。しかし、いい加減うんざりしてきたよ」

Gストーンに意識を集中しながら彼は答えた。

ただでさえ、緊急停止コマンドを解除するのも困難なのに、トモロの中枢に至るルートにロックを嫌というほど仕掛けていたのだから、アベルはよっぽど捻くれた奴だと凱は歯ぎしりする思いだ。

「少し、休憩しようか？」

数時間も見えない世界で格闘する凱を見かねて、命が提案する。

「いや。俺はまだいけるさ。それより命こそ、休んだらどうだ。そこにおいても退屈だろ？」

「ダメよ。私は凱のサポート役なんだから」

「オービットベースを離れても、役割は変わらないってか？」

軽く苦笑して凱が言った。

いつも、凱は過剰な負担を背負いながら、命懸けの任務を行ってきた。後方から見守る命はその都度、ハラハラしなくてはならなかった。

彼女にしてみれば、自分を労ってくれる優しさはすごく嬉しい。だが。

パレス粒子に侵され凱を危地に陥れた失敗に、もう彼の足手まといにはなりたくないと思った命は、なんでもいいから凱の力になりたかった。

戦う彼を応援する事でもいい、彼の傍を離れずサポートをしたい。何もできない事が、辛い。

（だって、私は凱の……パートナーでもあるんだし）

恋人同士という関係に、十代の少女のように赤くなってしまう命であつた。

だけど、想いは本物だ。

誰よりも凱を愛している。その気持ちは、鈍感な凱でも充分伝わっていた。

凱も、命は大切な存在である。彼女こそが彼の戦う理由なのだから。傍にいてくれるだけで、勇気を与えてくれる。そんな女性なのだ。

「そつだ。せめて、食事だけでも取らない？　そろそろお昼になるわ」

時計に目を落として、命が言った。

「そうだな……実を言えば腹も減ってきたし」

「私、食事持ってくるね」

「ついでに命の苦いコーヒーもお願いするな」

「苦いは、余計よ」

「マズイとは言っていないぞー」

べーっと、舌を出して、命は駆け出して行った。

凱はにやりと笑い、作業を続けた。

大切なものを、もう失いたくはない。愛おしいものと二度と離れたくない。

だから、俺は守る。

自分の弱さと恐怖に負けないように。

いかなる強大な敵と戦っても、最後まで生きる事を諦めない。

信じたものに裏切られようとも、自分の勇気を、信じると。

俺は、勇気ある誓いを、決して手放さないと。

長い髪をサイドポニーに括った、白い制服の女性が、胸元から赤い宝石を取り出した。

《 M a s t e r 》

「そうだね。はじめようか、レイジングハート」

高町なのはは、予定通りに訓練室に来ていた。すでに、無限書庫のユーノ・スクライア司書長に頼んで、特別な強層結果を張ってもらっている。管理局に正式採用されて間もない頃、模擬戦で結果ごと施設を破壊した事があったため、彼には念入りに防御力を強化してもらった。

『観測装置の調整完了。記録スタートします』

リインの声が、試験データの記録準備が整った事を告げた。いつでも、魔法を放てる状況だ。

『それじゃあ、なのはさん。お願いしますね』

シャーリーがなのはを促した。頷いて、なのははペンダントを宙に掲げた。

「レイジングハート、いくよ」

天に舞う待機モードのレイジングハートが、光り輝いた。

「レイジングハート・ジエネシス  
！！」

なのはは、魔導師の杖につけられた、新たなる名を叫んだ。

「セ ットアップ！！」

《Setup》

Gストーンの緑と桜色の魔力の光が、なのはの身体を駆け巡った。

管理局の制服が粒子に分解され、防護服へと再構成されていく。

髪はツインテールに纏められ、手には宝石から杖へと、合体変型したレイジングハートが握られている。

その、防護服を纏ったなのはの前に、仮想敵が現れる。シャリーが用意した、訓練用のホログラムだ。

湾岸地区に設けられたシュミレーターと遜色のない、本格的なものだ。ここら辺の充実度はさすが本局といえた。

『では、思う存分やっちゃってください』

仮想敵は、標準的な管理局の武装隊員である。いずれもストレージ・

デバイスを手にしていた。総数20名の集団だ。

なのは己の周囲に光弾を形成。まずは軽くアクセルシューターから撃ってみる。

「もう負けない」

合計20発の発動体を制御する。

「迷わない」

レイジングハートが呪文を解き放つ。

「例え何が敵となっても。私は私の勇気を信じる」

それが、彼女の「勇気ある誓い」だった。

「シュート!!」

《Acceler Shooter》

デバインシューターの応用形、誘導操作弾アクセルシューターは高速機動しながら、仮想敵に向かう。

彼らはラウンドシールドを生成するが、魔力弾は盾ごと貫通し、武装隊員を撃破した。

しかし、致命的なダメージではないため、すぐに態勢を立て直し、反撃してくる。

直射型砲撃魔法の攻撃を防御魔法でいなし、魔力弾で打ち砕き、砲撃を繰り返す。

「福音たる輝き・この手に来たれ・導きのもと・鳴り響け……」

デイベインシューター。

かつては五発のみの操作だったが、レイジングハート・ジエネシスの性質向上により、最大35発の射撃設定が付与された。

なのはの誘導操作能力も、並ではなくなっている。そのかわり、なのは自身の詠唱が必要にはなったが。今回はあくまで試験的に行使してみた。

弾は速く、魔導師達が防御するゆとりを与えない。

「アクセセル！」

加速。ギューン、と唸りを上げて仮想敵に着弾。

爆発が生じた。

全滅はしなかったが、武装隊員はかなりのダメージを負っていた。数人が、攻撃魔法を撃とうとする。

「よし。レイジングハート、次はデイベインバスター、いつてみようか」

《All right・Master》

レイジングハートは、砲撃モードにシフト。形状が組み変わり、中長距離用に特化した杖になる。

デイベインバスターはなのはが最初に会得した砲撃魔法であった。

なのはの膨れ上がった魔力が、光輝を増していく。

魔法陣が回転し、力で満ちた。後は照準が定まり次第、トリガーボイスを唱えればいい。

「デイベイン……バスター！！」

白熱した光の束が、爆発した。



KING  
OF  
DEVIL

NanoGaiGar

Part 2

Episode

もう少し

K I N G   O F   D E V I L

N a N o G a i G a r

P a r t 2

E p i

イメージBGM

勇者王ガオガイガー

「パリアツチヨ」

ロードス島戦記〜英雄騎士伝〜

「黒衣の隊列」

他

『なあ。大丈夫かな、なのはの奴』

ミッドチルダの首都。クラナガン。

スターズ隊副隊長「紅の鉄騎」ヴィータ三等空尉は、現在、時空管理局局地上本部周辺区域のパトロールの最中だった。

深紅の騎士甲冑に愛槌グラーファイゼンを手にしたヴィータは、一見すると小学生くらいにしか見えないが、実は熟練した腕を持つベテラン局員である。

彼女は念話で、離れた場所を警邏している同僚に話し掛けていた。

『どういうことだ?』

と、ライトニング隊副隊長の「烈火の将」シグナム二等空尉がヴィータに聞き返す。

シグナムは切れ長の目をした、ポニーテールの女性だ。

赤紫色を基調にした騎士甲冑を纏い、腰間には魔剣レヴァンティンを佩<sup>は</sup>いている。

司令官八神はやての方針で、機動勇者隊では、首都を中心に警備を強化していた。

フォワード達新人を始め、ヴィータら隊長勢もパトロールに駆り出されている。

一般には、JS事件の様なテロを警戒しての事だと説明がなされ管

理局はパニックを恐れて、報道機関には極力、情報を制限するように命じていた。

したがって詳しい事情はまだ一般市民には広まってはならず、しかし不安感が増している様な気がした。

そのためか、人々はあまり外出をしなくなったようである。

都市を巡回していたヴィータの目には、管理局地上本部襲撃の影響か、繁雑なストリートにも人通りが少なく映っていた。

活気が消えているようだ。

『本局行く前ののはを見ただる。あんな顔、スカリエッティにやられて以来じゃないか』

せつかく立直ったっていうのに、妙な連中のせいで元に戻っちまったじゃねえか！

『あいつ、あんな風に沈んでさ、いざという時ちゃんと遊星主と戦えるのかな……変に自暴自棄になって突っ込んでくんじゃないか？』

シグナムが溜め息を吐いたのが、雰囲気伝わってきた。

『お前は相変わらず心配性だな。特に高町隊長の事となると、な』

『ち、ちげーよ。あたしは部隊の一員として……』

『お前は彼女をそんなに見くびっているのか。そんな心配は余計なお世話なだけだ』

『だって。またあんな事故が起きたら』

『いつまでその事を悔やんでいる。いい加減自分を責めるのをやめろ』

ヴィータは反論しようと、口を開いた。

『友人を気遣うのはいいが、少しは彼女を信じてやれ』

『……』

『お前が好きなエースは、それほど弱い人間か。違っただろ。どんな時でも冷静さを失わないのが彼女の特質だ。この期に及んで不様な真似はすまい』

確信気味にシグナムは言った。

『それでも、判断を誤る事だっ て 』

『なら、私達が正してやればいいだろう。そのための仲間だろ』

シグナムの言葉を聞きながら、ヴィータは空を見上げた。  
灰色の雲が太陽を覆い、地上に陰りが生じていた。

『なんのためにテストロツサやお前がついているんだ？ 我々は一  
人で戦っているわけじゃないんだ』

守護騎士達のリーダーとしての経験から、シグナムは常にチームの  
連携を考えるようにしていた。

ヴィータも今や部下がいる組織の管理職として、充分理解している  
のだが……

『お前は先程《チームの一員》と言ったが、本当は友としてまた守

れなかったらどうしようと恐れてるんだろう?。」

なのはの事故からずっと、ヴィータは彼女の背中を守る事ばかり気にしてきた。

自分のせいで彼女が傷つくのが、怖い。

だから必要以上に神経質になってしまう。

『安心しろ。隊長の能力は健在だ。どうも昨日の報告を聞いてないらしいな、ヴィータ』

『昨日の?』

『新しいシステムを組み込んだデバイスの実験さ』

レイジングハート・ジェネシスの機能を測る実験だったが、なのはは通常の数倍の結果を打ち出していた。

『マジか!?!』

『ああ。リインの話では、エクセリオンより効率的かつ、恒常的な魔力運用が可能らしい』

それというのも、なのはのリンカーコアに加えて、Gストーンのパワーがエネルギーを生み出すために相乗効果を発揮しているからだとか。

『……そうか』

『本人自身も、落ち込んだ様子は見られない、だという。全くいつものエースに戻っている』

『ふん。心配かけやがって……』

と、ヴィータは微かに唇を綻ばせた。

『だから言つたろう。心配など杞憂だと』

風が強くなってきた。

雲が厚くなり、泣きそうな空模様だ。

『ちつ、雨が』

雨粒が、ぽつりぽつり、落ちはじめた。

『おい、ヴィータ！』

「なんだっ!？」

突如、空が明るくなった。

雲のカーテンを突き破って、強烈な光が眼を灼<sup>や</sup>いた。

「なっ……」

続いて、低い轟音とともにダウンバースト（下降気流）が襲ってきた。魔法を使える者達は咄嗟に結界を張って衝撃に耐える。

「なんなんだ、今の光は……」

地上部隊本部などのシールドで守られたものを除いて、家や道路などには亀裂が生じ、崩壊する建物もあった。人々は騒然となって避

難場所を探した。

すでに災害時を検討して、訓練してきた地上部隊の隊員達が、一般市民を誘導して避難させる。

ヴィータも部下に指示を出すべく回線を繋ごうとした。

（うおっ！？）

今度は地震か。ヴィータの足元の地面が揺れはじめた。

一方、シグナムは天空から飛来する集団の影を見つけた。

「まさか、あれは……」

『緊急事態発生！！』

管理局地上部隊本部から局員全員に通信が割り込んだ。

『各衛星軌道上の拘置所が何者かに襲撃されました。犯人はおそらく』

「連中か！！」

となると、あの光は、ミッドチルダの衛星拘置所が襲撃されたために生じたものか。

ヴィータは跳んだ。

地面を碎いて巨大ななにかが現れる。

「てめえらは！？」



狼狽しながら、ヴィータは戦闘態勢に入る。強風の中、グラーフア  
イゼンを振るう。

「ちえあああっ!!」

シュワルベ・フリーベンの弾が出現した敵を叩いた。  
攻撃を喰らった敵は光の粒になって消滅した。

「こいつら、前と違っている!？」

そもそも、なぜこいつらが動いている？  
スカリエツティが死に、ウーノが捕われ、ゆりかごが崩壊した時点  
で全ての機体が停止したはずではなかったのか。

「ちっ……」

『副隊長!!』

スバルの悲鳴がヴィータの脳裏に響いた。

『突然、ガジェットが!!』

『こっちもだ。こいつらを片付けたらお前達に合流する』

『了解しました』

ティアナが生真面目に返答した。

リインとユニゾン無しか。少々疲れるかもな……

はやてにも連絡した。すでにシグナムから増援が要請されてたらしい。

はやては急いで緊急に防衛部隊を調べると告げた。

「アイゼン!!」

《J a w o h l 》

グラーフアイゼンのハンマー部分が、変形し、ジェットを噴いた。

《R a k e t e n f o r m 》

「ぶつ潰す!!」

次々に現れたガジェット・ドローン?型の群れと、ヴィータは交戦に入った。

その光景を、上空から観察している者がいた。

菱形の浮遊物体、パーツキューブに乗った、白衣の男。

「魔法とやらの力がどれほど神の力に対抗出来るか、見せてもらうぞ……」

ソール11遊星主・パルパレーパは嘲笑いながら、そう呟いた。

次回予告

君達に最新情報を公開しよう！

ついに動き始めたソール11遊星主。

そして、ふたたび現れる宿敵。

ジェイアークは翼を開くのか！？危機を前にレイジングハート・ジエネシスは真の力を解放するのか！？

高町なのはとジェネシクの伝説が交差するシリーズ第三部「復活編」にファイナル・フュージョン承認！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9779m/>

---

悪魔王ナノガイガー 第二部・新生編

2010年12月31日20時01分発行